

342
188

南溟漁人著

解剖七之書

東京 昭文堂藏版

742-153

南溟漁人著

解剖せる臺灣

東京昭文堂發賣

明治
45. 6. 21
岡交

序

予れ近年、臺灣に在る事、前後二年間に迫る。母國と異なる自然界の現象、總督政治の得失の如き、又自ら心を動かざるものなしとせず。而かも、予は臺灣を観察するに、極めて便益なる生活に身を委したり。本書の如き、亦、此産物に外ならず。

設し、予の觀察に誤謬あらば、其は觀察の淺薄と、論旨の徹底せざるに因ずべく、偏へに識者の是正に俟つ。要するに、淹留二年間に亘り、猶耳底に残る問題を本

書は論議したるもの、臺灣に志す者の一祭を博すれば、予の望み足る矣。由來予に、舞文曲筆の才筆なし。其資るあれば、措辭に拘泥せず、權貴に阿らざる、唯野人率直の言のみ歟。孰れにしても、「解剖せる臺灣」一部は、今の臺灣を觀たる、予の偽らざる告白也。豈文字の文を以て、妄りに總督政治を謗議するものならんや。

明治四十五年四月

著者

解剖せる臺灣

目次

「一」臺灣の不透明體政治

總督五度代り長官六度代る——後藤と兒玉の統治振り——銅像の臺灣——凡長官曾根靜夫——浪人愛護時代——百鬼夜行時代——濁つた臺灣の政治

「二」臺灣自然界的現狀

臺灣は亞熱帶地也——強烈な季節風——基隆の名物雨——臺

海の本體は夏季にあり——雄大なる雲の峯——臺灣自然界的
三區別——南北臺灣の代表的植物——汽車から見たる草木の
變化——美人の口邊に鮮血の滴り——滿山綠珊瑚の旗山——
自然から割り出されたる人事

三 南部臺灣と北部臺灣

文明は海から入るが原則——中興の爲政家藍鼎元——實行者
の劉銘傳——人の臺北——砂糖の空氣——植民地的住民の資
格——眠つて居る北部臺灣——總督閣下の徳——南部紳士の
振舞——所謂砂糖屋さん——砂糖屋は南部の一勢力——老妓
の砂糖智識——臺灣花柳界のかき入れ時——南部臺灣の進歩

四 臺中遷都論

劉銘傳の臺灣經營——臺北と政治の中心——臺中城の荒寥——
——鹿港の價值——生産地の閑却

五 動物の臺灣耶、植物の臺灣耶

蕃山の雲霧——動物に貧しい臺灣——水中の一日間——公用
の官人は幸福——灣吏と煽風器——山に生蕃到る處にマラリ
ヤ——臺灣植物は支那系——人體の缺を補ふ自然界——フオ
ルモサ(美島)の實

六 誤解されたる臺灣

臺灣の俚語——臺灣の今日——内地政治家と總督府——政治家の利權獲收——不鮮明なる政治上の旗幟

「七」 妙な臺灣視察の流行

基隆迄海上千里——海上の無線電信——天下の代議士様——有頂天になる代議士先生——強ひられたる視察——活字で拵へたる臺灣

「八」 失敗せる糖業政策

所謂露菌病者——天下の曲事——當時の殖産局長——寛大過ぐる恩典——巨額の補助金下附——成功は只表面の事實——生産過剰の弊の出所——製糖會社濫設許可の弊——匂はせる

「九」 後藤新平式色彩

情實——北部は砂糖地でない——北部臺灣は茶の産地也——矛盾せる産米改良法——甘蔗の強制栽培——聖代の大怪事——長いものには巻かれる

後藤さん——後藤さんの遺した奇蹟——巧妙なる胡麻化し法——後藤の附景氣——情實と對政治屋關係——後藤新平の人物を説明する彩票——後藤式彩票の運命——後藤式色彩の絶無になる時——所謂御聲懸り

「十」 御祭り騒ぎの鐵道全通式

島内空前の開通式——微風にゆらく鮮かな滿艦飾——常識外

れた款待法——官費で枕席の塵を拂はせた來賓——當局者が接待上の苦心——内田長官の尻拭ひ議會で四萬餘圓

「十一」吏臭に満ちたる臺灣鐵道及鐵道ホテル

官吏の都——囚人扱ひの乗客——灣鐵獨特の方法——列車が「イ」の不親切——臺北停車場樓上無用の一室——臺灣に過ぎたるホテル

「十二」佐久間總督閣下

天下の好々爺——宏莊なる全島一の大官邸——謹嚴なる佐久間總督——總督の寵人は何者——總督は現代の空氣以外の人也——自分で自分を解する佐久間左馬太——馬鹿殿様扱ひの

總督

「十三」内田民政長官閣下

小心翼翼たる事務家——有象無象の相手——官紀振肅問題——歳暮の贈物を突き戻す人——受けのわるい新民政長官——内田嘉吉は良吏である——渠れは矢張り話せる——内田は一個の傀儡——權變の掛引の出來ぬ男

「十四」逐はれたる大島久滿次

失敗の歴史——林本源事件——後藤新平の驚き——杉山茂丸等の取做し——後藤系兩尾の勢力——天から降つた不意劇——喧嘩兩成敗の結論——大島政友會に款を通す

「十五」歴代の總督中誰が一番豪い

臺灣の創業に骨を折つた樺山總督——多士濟々たる初期の總督府——民政に移る迄の骨組み——慧星の總督桂太郎——小説寄生木と乃木大將——乃木太夫人壽子之墓——兒玉は人物本位の政治家——兒玉の南清策——南清策の大蹉跌——臺灣に残つた兒玉の逸話——清濁併せ呑む兒玉源太郎

「十六」濁つて吹く臺灣の吏風

臺灣では局長を何故閣下と云ふか——臺灣の三つ釘——帯劍の教員と醫師と雑誌記者と——洋行を條件としての就任——法性寺の入道より長い肩書の人——囑託政治の弊——續々野

に下る官吏の古手——新來醫の思はく

「十七」臺灣の自稱夫人氣質

所謂自稱夫人の半面——東京ッ兒振る灣妻——神聖な夜會へ灣妻同伴——灣妻の定義——家事を治めるを不名譽と心得る自稱夫人

「十八」長官閣下の視察振り

仰々しい巡視行列——到る處へ威を示し歩りく——長官のへなぶり道中——前觸れの視察の價值——新渡戸博士と長官

「十九」鮮明を缺く愛國婦人會臺灣支部

一般官衙も同然——雑誌の命令的購読法——實際の愛國婦人
會員が知らない會の事業——新聞社を左右する愛國婦人會——
——帶劍の婦人雜誌記者

「二十」樟腦專賣の真相

樟腦は臺灣の特産物——記憶すべき内部の魂膽——名を既得
權に藉りし外國人——英領事不信任の稟議——製腦業の退歩
——罪は後藤新平に在り——サミュエル對後藤新平の祕密——
——サミュエルの妨害的商策灣腦悲境時代——製腦は一種の冒
險事業——製腦業は只取るやうな金儲け——曰く附の賀田金
三郎——製腦界の革新斷行期

「二十一」臺灣銀行の財閥

不思議な現象——柳生下阪の暗闘——後藤系及桂系の財閥——
——黨人的政略に占領されし臺灣銀行——銀行の資本と製糖會
社の資本比較——偏頗なる放資法——對岸貿易の衰へる一原
因——憎むべき財閥の弊害

「二十二」臺灣事業界の人物

筆の天地から實業の天地へ——澁澤榮一と共通點——渠れと
してゐるい處が二つある——おとうさん——を浴せ掛る——
賀田金は長閑——榎瀬軍之佐は新聞記者出身也——灣辨出身
の中村啓次郎——中村は策士——兆民門下の荒井泰治——臺
灣の新人物——臺灣を知らない臺灣事業家

「二十三」疑問の阿里山

世界で有数な美しい林相の阿里山——長官の比較した木曾と阿里山——阿里山の伐採木材は木曾と略は同額——阿里山に對する風説——阿里山材はくるひ易い——水利のない阿里山材——官營木材會社設立の噂

三十四 大仕掛なる理蕃事業

蕃族分布の區域——戰傷者頻々たる討蕃隊——山地行軍は軍隊出動の別名——人知れぬ尊き犠牲——無能なる討蕃隊——お祭り騒的警戒——效果の鈍い蕃人懐柔策——軍事思想及戰術思想の皆無なる蕃界巡查——今の討蕃は穴の中の仕事——名譽の戰傷も縁の下の力持

三十五 骨抜きになりし臺灣の新聞

進歩も發展もない現在の狀況——新聞紙と云ふよりも半官報——無冠の宰相の實も何もあつたものでない——記者は直接總督には逢はれない——當局者の不都合——臺灣の理想的新聞記者——新聞社の理想は總督府の理想——新聞の制裁を怖れぬ灣官吏——臺灣の不具的政治——活氣ある臺灣創始時代の新聞紙——雜誌高山國と源太郎馬車——御都合主義の新聞策——守屋善兵衛の人物——舊社員守屋を大連に慕ふ——三者三様の相違點——守屋は急進富地は漸進今井は固守——臺灣總督と臺灣の新聞

三十六 喰ひ物にされし林本源

三分裂せし臺灣一の名家——一種不可解のお家騒動——林家

の祖先——林維源は林家中興の人物——老専制族長の權威——
——維源歿後益々加はる第二房の權威——林維源後藤新平に子
孫の將來を托す——長官島民の私事に容喙の嚆矢——益甚し
き一家の暗闘——林家の總管事大島系の里見義正——林家の
製糖會社——内地新聞に現れた林家の真相——第三房林彭壽
の野心——幼年者誘拐の實例——小作米取立の窮策——突然
湧いた一家の訴訟問題——胸に一物ある檢察官長——問題落
著と總花的報酬——松井四郎の陋劣なる心事

『二十七』移民は糖業策の犠牲

國籍のない臺灣植民地——人口過剩問題から起る臺灣移民——
——臺灣移民の第一期——第一期の移民費僅に三萬圓——第一

期の兒戲的移民事業——何故植民局を設けない——東部臺灣
の移民村——人の住む家すら満足にない移民村——目的地到
着迄の困難——甘蔗の強制裁培——隘勇線を境界とする危険
な移民村——哀れ極まる移民村の慘狀——移民策の奥の手——
——西部臺灣の移民は論外

『二十八』全島港灣の現状

東部臺灣には良港が一もない——衰微せる港灣の現状——基
隆は人間本位の港灣——打狗は貨物本位の港灣——不完全な
る打狗市街の設備——労働者の住めない打狗——基隆は横濱
打狗は神戸——閑却されし安平と淡水——港灣は臺灣の生命

「二十九」女學校と中學校の半面

中流以下は中女學校を覗かれぬ——中學の模範學寮——英國式セントルマンの養成——ハイカラ教育の極點——大金を掛けて男生を女らしくする——文相に見せたい學寮——女學校と中學校の空氣

「三十」特別會計の内容

數字的實證の列擧——眉を擧めたる新植民地の將來——自給植民地になつた——殆んど八倍強の増收入——年々歳入を増加す——四十五年度豫算に付一言——減收見込額——歳入額——歳出額——關稅取扱費なる名義——臺灣の事業公債——

事業公債法に據る借入金——特別會計の平面描寫——母國の豫算に拮抗する臺灣の發展——あけていはれない秘密——總督府の財源査閲

附録

- 高山國放言……………
- 臺灣の俳天地……………
- 臺灣紳士の宴會……………
- 臺灣の南方思想……………
- 詩的なる門聯研究……………

解剖せる臺灣 目次終

解剖せる臺灣

南溟漁人著

「一」臺灣の不透明體政治

臺灣は我日本が有つ植民地の最も古きもの一つである。而かも其領有は帝國の領土擴張史上に於て光輝ある處の開卷第一章に該當する。今日から之を數へると前後十八年現總督佐久間左馬太に至る迄恰度總督が五度代り、民政長官も六度代つて居る。先づ總督の方を歴年順にいふと最も初期の總督が樺山大將であつた。次が桂侯爵次が乃木大將、次が故人になつた兒玉大將、其次が現任者佐久間大將になる。民政長官の方では水野遵と云ふ人が、辦理公使といふ肩書で民政

總督五度
代り長官
六度代り

臺灣の不透明體政治

後藤、
兒玉の
統治

二
解明せる臺灣

長官を兼ねたのが一番初めて、其れに續いては、曾根、靜夫、後藤、新平、祝辰、已、大島、久満次、現任者の内田、嘉吉など云ふ順序になるが、曾根といふ人が一番人の記憶に存してゐないのが氣の毒だ。其中でも水野、遵は民政長官で、辨理公使といふ肩書を有つてたのが、今から見れば振つて居た。夫から、民政長官として、統治の實を擧げたのは、後藤、新平に及ぶものがなく、總督では兒玉、大將に及ぶ者がない。臺灣の今日あらしめたは、此二人者の爲政振りが、大に與つて力ある。同時に、又今日の臺灣を伏魔殿でもあるかのやうにしたのも、此二人者の力である。即ち二人者は、植民地臺灣の功績者であると共に、又害毒を流した者である。問題は、則ち是だ。今の臺灣の行政組織の上から見る、中央行政機關にせよ、地方行政機關にせよ、乃至は立法的機關にせよ、司法的機關にせよ、警察機關にせよ、皆曾て二人者のした事の踏襲にしか過ぎん。此點に於

銅像の盛

凡長官會
根靜夫

臺灣の不透明政治

三

て兒玉、源太郎も豪ければ、後藤、新平も豪い。臺北の公園、臺中の公園、臺南の公園には、兒玉、源太郎の大理石像がある。後藤、新平のは、臺北の新公園に一つ、頃日又一つ、臺南に建てられたよもないが、之も早晚、臺北、臺中、臺南の三ヶ所へ兒玉、源太郎同様に建てられる事になつた。臺北の圓山公園に水野、遵の銅像があるにしても、新に祝辰、已の銅像が臺北の隋圓公園に建てられたにしても、島民に最も深い印象を與へるのは、兒玉と、後藤の大理石像と銅像に及ぶものはない。言へ換へれば、此二人者の大理石像と銅像とは、二人者の功罪を永遠に傳へる爲の又なき紀念標である。過去の臺灣を論ずるにしても、現在の臺灣を論ずるにしても、乃至は將來の臺灣を論ずるにしても、此大理石像と銅像が中心になる。若し、此中心を措いてする者があるなら、それは世界第一の不覺者だ。只、獨り、銅像の主にならん、凡長官會、根、丈が例外だ。兒玉、式を手

ツ取り早くいへば、大蛇を揮ふ式である、稍之に類似したのが後藤式である。故に見玉式と後藤式とは、華やかである、玉蘭の葉のやうに白く冷たく、さびしいのではなくて、佛桑花のやうに、赤く熱烈に賑かしいのである。勢ひ大道具、大仕掛にならざるを得ん譯になる。當時の統治方針が、人物本位的若くは、多角的、膨脹的、濫費的であつたのは、自然の結果であらう。當代の官吏採用法を皮肉るなら、人の爲に職を設けたかの傾きがある。故に當時の臺灣總督府には、内地で志を得られない、さまざまの豪傑連が集團して居た。吾輩は、之を浪人愛護時代の臺灣といふ。國民黨の豪傑添田飛雄太郎や、半文士の長田秋濤や、道樂伯の後藤猛太郎などの居たのが、多分此の頃であつたらう。役人とも、食客ともつかん人間が、其處の官舎にも、此處の官舎にも、ごろ／＼して居た時代の臺灣總督府は、一種の梁山泊であつた。「君も何日まで遊んで居た

浪人愛護
時代

百鬼夜行
時代

處で仕方がなからうから、何か一つやつて見てはどうか』に對し「しかし兒玉は總督だし、君は民政長官だし、吾輩のやるものがないではないか』は、當時添田對後藤の問答を傳へた有名な話柄である如く、浪人愛護時代の臺灣總督府が如何に亂脈であつたかは、想像に餘りある次第である。無論其頃は獨立會計でもなからうし、新しい殖民地の要望を満たさする爲には、母國の政府が大抵の事を大眼に見て呉れて居た。此處に於てか、各種の大袈裟な事業が續々臺灣全島に企てられ、奸商が跋扈する、貪吏が羽翼を伸して濶歩する。夜の黒幕一つ切り落した陰には、あらゆる醜事が行はれたと云ふことだ。百鬼夜行とか、伏魔殿とか云ふ文字は、實に恚ういふ時の爲に拵へたる文字の如くある。有名な高野孟矩事件の起つたなぞも、此時だ。鐵道ホテルの如き、無用の長物の出來たのも、此の頃だ。臺灣の玄關飾などと、之を今日云はれて

臺灣の不透明體政治

も致方のない點がある。根底の危なかしい會社などの出來たのも此頃だ。つまりいふと、今の臺灣には、此時代の弊風が大分残つて居る。いや残つて居るばかりでない。大に助長する傾向が見える。内地の悪政治家や、一種の野心家から、睨まれて居るのも此故であらう。内地の新聞や雑誌に、一記事の出る度、總督や民政長官がびくつくも、同じく此故であらう。其れも、之も臺灣の總督政治と云ふものが、濁つてゐて透明體でないからである。苟も、經濟的標準から成る、已に秩序の整つた植民地に、植民地の第一期時代に於ける、政治的標準を取るのが間違である。植民保護政策に情實が伴つたり、情實に植民保護政策が動かされたりするのは、決して不思議でない。吾人は、今の臺灣の總督政治に與へるに、掩蔽的政治若くは混濁的政治、不透明體政治の新熱語を以てする。其うして、此項を以て「解剖せる臺灣」の緒論にする。

二 臺灣自然界的現状

翻つて、臺灣の自然界を見る。内地とは無論違ふ。朝鮮植民地、樺太植民地、關東州植民地とは、大分趣が異つて居る。即ち、臺灣は亞熱帯地である。純然たる熱帯地では決してない。南部臺灣は熱帯であるが、北部臺灣は暖帯である。否、熱帯と暖帯の合の子である。本統の熱帯地をいへば、赤道から北に向て二十三度半、同じく南へ向つて二十三度半、其處が回歸線になる。熱帯は則ち、此回歸線と、回歸線の間になる。臺灣で此回歸線をいへば、恰度嘉義の邊になる。其證據には、嘉義から南の植物が、嘉義以北と全く異つて来る。其處で衛生學上から、亞熱帯といふ名稱が出來たのだ。内地の琉球も亞熱帯である。鹿兒島になると、暖帯になる。恚ういふ次第で、同じ臺灣でも、嘉義から以南と、以北とで

強烈なる
季節風

解明せる臺灣

八

は温度が大分異ふ。其處へ婉りくつて北から南へ馬の脊のやうになつて高山峻嶺が重疊し、全島一萬四千九百八十二方哩の面積を、東と西とに縦断する。其れに、又毎冬季十月から翌春三月に掛け、強烈な季節風が吹き荒ぶ。其都度多量の水蒸気が海上から抱擁されては、島の北端なる基隆一帯の山嶺に衝突し、凝結して雲雨になり、陰鬱なる連日の天候になる。之が北部臺灣の雨季だ。殊に基隆臨海を街の如きは、一ケ年の雨量五千耗を算し、絶東第一の多雨地を以て目される。これより十里に足りない臺北になつては、水蒸気分離の烈しい處から、同じ降雨季でも、雨量は基隆の半にすら達しない。要するに、雨は基隆の名物だ。基隆人は、雨の中で、半年間暮す。然らば南部臺灣の人はどうかと云ふに、南部臺灣の人は、基隆人が雨に惱み、雨に苦んで居る時、風に苦んで居る。打續く晴天に苦んで居る。風は南部臺灣の名物だ。丈餘

基隆の名
物雨

臺灣の本
には夏
季あり

の檳榔樹に風はためき、青い芭蕉葉に浙瀝の聲發すると見る間に、其風力は、更に大地の砂礫を怒號しつゝ、旋回し、乃至は攪拌し、灰のやうになつて天に飛ぶ。之が基隆に雨降る如く、半ケ年間も續いてく打續く。其上大氣が乾燥して、一滴の降雨がない。即ち盛んに吹く季節風が、中央山脈に遮られるので、西南部地方には、海上の水蒸気が雲雨をなして来ないのだ。けれども、海上程に、季節風の吹かぬ毎年四、五、六月頃になると、此極端から極端な南部、北部の氣象が一つになつて平均してしまふ。これが臺灣夏季の現象である。臺灣の臺灣たる實際、亞熱帯地の亞熱帯地たる實際は、寧ろ此夏季の自然界にある。即ち夏季の自然界は臺灣といふ植民地の本體を、最も眞面目に語る時である。かの美しい雲の變化する、奇觀壯觀を見る事の出来るのも、亦此盛暑中であつて内地の所謂、視察者の足跡が、漸く基隆埠頭に絶つのが、恰度此時である。本統に、十分な眞面目の視察の出来る時に、内地の視察者は来なくなる。

臺灣自然界の現状

九

のである。内地の視察者といふ者には内地の寒さを臺灣の暖い處へ避けながら来るなんと云ふ不所存者が多い。夏の臺灣の自然を見ないで臺灣を論ずる政治家があるなら其政治家先生の所論は書餅の夫れと同一の意味になつて来る。臺灣は島であつて内地なれば九州の其れ歐羅巴なれば愛蘭の半分、米國なればコンネクチカットとベルモント、二州を合したもののよりも稍大きく至つてせよこましい處だが、さて夏の臺灣の天地は如何にも大陸的の處がある。かの烈々たる陽光が椰子の葉陰に黥面黒身の人を無遠慮に照らす時、雪山やシルピヤ山脈の天には雄大な雲の峯が崩れ出す。此場合に於ける全島は光りの天地である。輝きの天地である。動物はと見ると、悠々閑々として水牛は水の中に眠り、人間は小さい窓のある薄暗い陰府のやうなこの床に、睡眠の快樂を貪つて居る。つまり云ふと炎帝の旗一度天の一方

に閃いたが最後ありとあらゆる島内の動物は自然に征服され終るのだ。臺灣の夏の自然界は斯様に無限大の權威がある。處が此炎帝の權威にも臺灣總督府の權威にも屈しないものがある。即ち臺灣名物の生蕃族が其れだ。海拔數千尺の蕃山になると、全島の盛夏中でも内地の秋の如くである。秋の如くあると云ふよりも、秋吹く風のやうな清涼極まる風が峯から峯に吹き渡つて、かの慄悍にして文字のない原人に等しい蕃族に均等なる恩恵を與へて居る。斧の入らぬ千古の森、文明の空氣に觸れない自然の別天地、其處には贅澤なる内地視察者の怖れる如き、熱帯地の夏はないのである。

區別すると臺灣の自然界は三つに分れてしまふ。第一が北部臺灣第二が南部臺灣、第三が蕃界もつと嚴格な意味でいへば、西部臺灣もある、東部臺灣もあるが、先づ臺灣の自然界をいふなら、南北臺灣と蕃界の三

つ丈分ればよい。殊に南北臺灣が臺灣の首要部を形作つて居る。而して南部臺灣の果と北部臺灣の果位極端なる自然は全島中にない。前にも云つた如く、北部の草木と南部の草木の相違は内地の九州の果とと北海道の相違どころの話でない。若し、北部臺灣を代表する植物ありとせば、其れは相思樹であらう。若し、又南部臺灣を代表する草木ありとせば、其れは蘇珊瑚であらう。其れかあらぬか、今の臺灣俳句界には、北部に「相思樹」派なる一派がある、南部に「蘇珊瑚」派なる一派がある。此の二つの比較的進んだ處の俳句系統が、立派に臺灣の南北思想を代表したものだ。相思樹は豆科植物に屬し、臺灣式にいへば相思仔、内地人式にいへば臺灣柳になる。柳に似た葉や枝が、遠望には柳の如く見える。相思樹の名の因つて來る處は、其の互生葉である點からであらうか、相思樹の命名は、如何にも詩的で面白い。其れから春

から秋に至る間、全身黄金色、綿のやうな花糸から成る球状の花が咲くを見る間に、又實が結んで、花實一枝上にある事が通例だ。原産地は濠洲のフセシ一群島、風雨に堪へて、日光を遮つて、瘴熱を防いで、深根性で瘠地に能く生育する處から、北部臺灣では、之を道路樹、防風樹として盛んに移植する、薪炭材料にもなるから山野にも栽培する。臺灣縦貫鐵道の基點たる基隆から汽車に乗ると、新竹あたり迄の山野は、全部相思樹に埋められて居る。相思樹ばかりで、他に木がないかと疑はれる。又途中、臺北停車場から下車して、有名な臺北三市街を歩いて見ても、道路の兩側面には、屹度此相思樹が南風に戦いて居る。しかし、新竹を去て一驛々々南へ入る程、此相思樹の影が次第に少なくなつて行く、南部臺灣の大都會臺南附近になつては、殆んど見當らない迄になる。之を見ても、相思樹なる常綠喬木が、暖帯のものであつて、熱帯向きでない事が

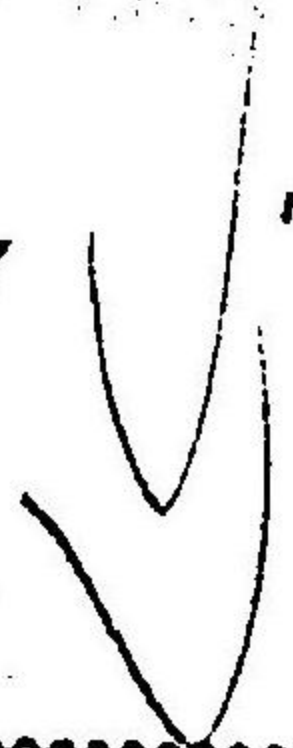
美人の
鮮血の
滴りに
染まる

解明せる植物

一四

知れる。然らば、列車が南へくと入る時、相思樹に代つて、旅客の眼を惹く植物は何かといへば、其れは椰子である。檳榔樹である。甘蔗である。緑珊瑚である。緑珊瑚に至ては、汽車の窓からは見られない。何れにしても、南部の植物は、北部と反對になる。汽車に乗る者を見ても、老人といはず、若い人といはず、子供といはず、皆口邊から血液やうのものを滴々落しつゝ、腮を動かして平気で居る。甚しいのは、花のやうな美人にして、尙且つ臍面もなく之をやつて居る。汽車を降り、俚に乗つても、車夫が又其通り、氣味のわるい事が、一通りや、二通りでない。北部臺灣の土人には見られない事だ。讀者よ、熱帯植物の一つなる檳榔樹の實を彼等は嗜むのだ。之は暹羅の如き、馬來半島附近の土人及南洋おしなべての土人と同じ慣習である。之だけ見た丈でも、自然の感化する、北部土人と南部土人の相違は著しいのである。即ち此自然界に

滿山綠珊瑚



於ける氣候の相違、植物の相違か、地勢の相違か、雖がて、南部人の思想、北部人の思想に分れたのだ。然らば、緑珊瑚のやうな、數の少い植物を何故、南部臺灣の代表植物に數へるかといへば、北部臺灣に絶無といつてよい位、南部に多いからである。長路洲といふ人の詩に

一種可人離落下。家々齊插綠珊瑚

想從海底搜羅曰。長就苔痕潤不枯

といふのが、能く其植物の性質を説き明して居る。つまりいふと、仙人掌科の一種で、中でも肉質で、長葉で、卵倒状をなしたものの、扁平笏状をなしたものが一番多い。之が夏の暑いさ中になると、其刺腋から、大きい純白な螺旋状の花を咲く。南部の咽喉といふも云ふべき、打狗港端の旗山の如きは、滿山此綠珊瑚である。之が又一種特別のもので、樹幹の大きいになると、二三間以上に及び、真綠色の細條が、葉の代用をして、

臺灣自然界の現状

一五

自然から
割り出さ
れる人事

解明せる臺灣

一六

葉らしいものが全くない。若し手でも觸れやうものなら、其肉質の細條がほろ／＼と折れる、折れて白い液汁が出る。何れにしても、臺灣の南部を代表する一種の奇なる植物であつて、如何に見ても、緑の珊瑚とより見えない形状であるのである。要するに、臺灣の自然界は、臺灣の地を、一度も踏まないものに解せない、様々なる天象、地象がある。政治も、教育も、宗教も、文學も、殖産、興業も皆此自然から割り出される。此自然の攝理に戻つて、人為の企てに及ぶものは必ず倒れるに定つて居る。内地には、臺灣の地を一度も踏んだともない僻に、臺灣の製糖會社に重役たる人の多い世の中だ。内地人が、爪哇糖よりも、不廉な砂糖を嘗めるが如きは、決して不思議でも何でも無い。思へば、我利我利亡者どもの蹂躪に委する、臺灣の自然界が可愛いそうでならぬ。新高山は高い、濁水溪の水は長へに流れて息まぬ。此自然界に、丈は、我利我利亡者の

文明は海
から入る
が原則

怨の手も及ばないやうだ。

『三』 南部臺灣と北部臺灣

支那で、南京と、北京が入れ代つて大都會になつた如く、我日本で、京都と東京が入れ代つて大都會になつた如く、南部臺灣の首府と、北部臺灣の首府とは入り代つたのだ。何處の國、何れの時でも、文明が海から入るのは原則である通り、臺灣の文明も海から入つたのだ。南清の文明推移は無論だが、其昔和蘭陀の文明が這入つて來たのも、南洋一帯から、呂宋あたりの文明の這入つて來たのも、皆今の安平からである。安平を経て臺南に來た文明が、即ち臺灣に於ける昔の文明である。勿論今の文明も、昔の文明の餘波は十分受けてゐるが、我日本の文明に至ては、北から進んだのだ。そうして、昔の文明を破壊し、若くは改善して、取て代

南部臺灣と北部臺灣

一七

中興の爲
政治家藍鼎元

劉銘傳の
實行者の

らうとする過渡時代が今なのだ。全島統治機關の大策源地を置く臺北が、急に大都會になつたのは、決して偶然の結果でない。臺北なる北部臺灣の小都會が、急に大都會になつたに就いては、臺灣中興の爲政治家藍鼎元の治臺謀善策も與つて力がある。又劉銘傳の治臺方策も與つて力がある。劉銘傳が臺北府城を拵へ、支那の福建の都府と往來の便を圖るべく、其昔南にあつた政治の中心を北へ轉じて、巡撫衙門を臺北へ置いたのは、藍鼎元の理想を實行したのである。要言すれば藍は立言者で、劉は實行者であつたのだ。就中、劉が鐵道を拵へ、そうして臺灣省なるものに纏めた全島を、更に臺北、臺南、臺灣の三縣、臺東直隸の一州に區分し、其を尙出來得る限りの交通機關で聯絡させたのが、纏て中央集權の實になり、臺北の繁榮を來したのだ。誰も知る如く、茶は北部の生産物である。米は中部の生産物である。砂糖は南部の生産物である。鹽は

人の臺北

沿岸に於ける生産物、製腦は内陸に於ける生産物、木材は中央山脈に沿へる生産物である。劉銘傳は、兎にも角にも、基隆新竹間の鐵道を先づ便りにして、全島彼此の産物を融通し、農工商賈の招徠に盡瘁し、北部臺灣を代表し、全島の都會を代表する臺北經營の爲には、渾身の精力を擧げて傾けた。其後へ直に、以て結びつけたのが、即ち我が日本の稍消化した文明である。そうして、古の江戸と、今の東京と、大阪趣味と、南洋趣味と、南清趣味とを、ごつちやにしたやうな空氣が、北部臺灣には漲ぎるのだ。つまり臺北は、基隆から臺北の咽喉である如く、全島の咽喉である。内地から來て基隆から上陸した者も、對岸から來て淡水から上陸した者も、必ず一度は臺北の土地を踏む、其うして此處に於て、東へ行くもの、西へ行くもの、南へ行くもの、乃至は其處へ留るもの、用向きと、其人とが選り分けられてしまうのだ。要するに、臺北は人の臺北で、人間の集散口である。又之を割合にしていへば、臺北へ留るものが七分で

南部臺灣と北部臺灣

ある南部へ行くものや、他へ散する者が三分である。即ち臺北は七分三分の都會である。此筆法でゆくと、北部臺灣と書いて、びちぶざんぶと傍訓を附つても差支へがないやうだ。北部臺灣を代表する七分三分の臺北は、常に東風が吹く、臺灣を砂糖島だといつた處で、臺北には砂糖風がない。若しあれば、砂糖の空氣位であらう。東風が盛んに吹いて、砂糖の空氣や、何ぞを震蕩るのが臺北の現状だ。臺北へ来て、五日も六日も泊り込んで動かんものは、大抵總督府へ用向きの爲に來る人である。島内の廳長さんもあらう、支廳長さんもあらう、又は廳の事務官さんもあらう、或は製糖會社の重役殿もあらう、或は御用商人もあらう、或はある意味の政治家もあらう、其うしちや、叱られたり、要求されたり、哀願したり、報告したり、さまざまの辭令が交換されたり、幾多の盲目判がどん／＼捺されたりする。街の商人にした處で、此殺風景極まる、こ

つ／＼する植民地の空氣を油つこく、極端に艶ッぼくする處の藝者や、女郎や、料理店や、飲食店や、職工や、車夫の輩に至る迄、つまりは、總督府と云ふ、一つの嚴然たる物體に寄生する處の依賴的生活者なのである。來た人にもものを賣る、來た人に愛嬌を賣る、來た人に勢力を賣る、之れ位世の中に程度の低い金儲けはないのである。越後の新潟市が、縣廳へ用があつて來る人の意を嚮へる爲に生きてる主業に、美人を養ひ、美人を其れへ賣りつけると、略ぼ同一方法、いや同一空氣であるのが、今の北部の臺北だ。其れ故、臺北の商人には、大きい氣魄のものがない。少し小金でも溜め込むと、さつぱりした住居に棲んで、娘を女學校へ遣つたり、生花を習はしたりして、直ぐ小成に安んじてしまう。恁ういふ點からいつても、臺北の商人には、植民地的住民の資格がない。未だ大體の荒削りもしない木材に、艶布拭をかけるといふのが、臺北商人の遣り法

だ。其れも之も、臭い吏風の中にはばかり蠢動して居るばかりだからだ。人間に喩へると、臺北は若年寄りである。十八歳にして妻を娶つて子を産ませ、更に嫁を迎へて孫を見、四十にして爺さんの格になつた人間のやうなものだ。臺北の商人團が飛躍向上の時は、恐らく、臭い吏風中の夢から覺醒して、一聲高く大懸山の頂へ向つて、大欠伸をした時であらう。斯ういふ事は、内田嘉吉では分らない、佐久間左馬太には尙分らない。若し、此能く分る者があれば、逝いた兒玉源太郎であらう。現在人なれば後藤新平であらう。

何れにしても北部臺灣は眠つて居る。第一人物がない。役人中の是れはと思ふ人を引き去り、三井とか大倉とか、三菱とかの代表者や、二三辯護士や、銀行の人や、二三紳士を引き去つた全臺北三十萬の人口中、何處へ押し出し、こも恥しくない人物があるだらうか、酒色に耽溺する餘

眠つて居る北部臺灣

總督閣下の總督

暇を以て、人格修養に力めるのが、今日の急務であらう。更に北部の眼を南部へ轉じて見る。臺中から以南になればなる程、風物が植民地らしい、時の爲政治家の玄關裝飾的政策の恩恵に洩れた南部臺灣は、官衙の建物からいつても、市街の設備、道路の現状からいつても、荒寥見る影もない光景だ。がだくして、跳ね飛ばされる危険を、臺灣の所謂輕鐵なるものに忍んで、鳳山、阿猴、蕃薯藜附近の部落々々を見る時、臺灣の玄關飾たる所以が能く會得しうる。總督閣下の徳未だ全島に及ぼし兼ねるといへば、其れ迄だが、同じ統治下の民であつて、役人であつて、島の最北端の吏民と、島の最南端の吏民とでは、幸福の拾ひ、落しを互にしたやうな光景だ。然れども、忠實なる總督閣下の吏民は、決して怨嗟の聲を發しない。勤勉に次ぐに、勤勉を以てして、臺灣北部の吏

民の爲や、母國人の爲に、回歸線下の熱天地に植民地人たる本務を遂行しつゝある。

しかし、烈しい勤勞者が、烈しい休養法を取るのには昔からの原則だ。烈しい勤勞者である處の、南部臺灣の吏民が、又之に洩れないから不思議でない。赫灼せる太陽の光りが、有名な赤崁樓上の屋根瓦に消え、島の開祖延平王の祠の棟木に、涼しい清い風が樟の葉を揺る時、南の首都臺南の四春園や、御影華壇の燈影に、黒い動物が浮き出される。立つて跳る、座つて騒ぐ、障子も、硝子戸も其騒ぎでびり／＼する、果ては原始人に歸つた如く、身に一糸をつけない怪物迄が動き出す。之を以て紳士の清遊とか、一夕の佳宴とかいへば、南部の紳士を侮辱した事になる。恐らく這は紳士の振舞でなからうとは思つて見ても、紳士でなくて、さて之が誰れに出来る散財かといふ疑問が湧く。臺南とは限らない、打

南部の紳士の振舞

所謂砂糖屋さん

狗とは限らない、嘉義とは限らない、鳳山、阿猴、恒春とは限らない。島の南の方の夜は、大部分是であるといつて差支へがない。種類をいへば、官吏、所謂砂糖屋さん、建築家、官廳、支廳の技師、技手なんぞと云ふ手合ひが、巴里になつて、驚痴狂ひ、其うして一日の勤勞を慰める譯にもなる。密會の席や、宴會の前後に贈賄するなんぞと云ふ野暮な事は全くしないやうだ。若し具眼の當局者があつて、先づ差當つて打狗邊の建築に就いて調べたなら、其等の消息が分ると思ふ。又著者の如き無資格者が賢明なる總督閣下の管轄地に、具體評を下す如きは以上の沙汰にもなる。一寸いつても、南部臺灣は恁んな有様である。旅人があつて、先づ臺南あたりの宿屋へ着いたとせよ。其家には、強いて空ければ、二つや、三つの室のあるに拘はらず、『どうもお生憎様でした』を喰はして追飛ばす。續いて、所謂砂糖屋さんらしい者が、電話か何かで申込んだが最

後、此第一の旅客に断つた室が、非常な速力で開放されるのである。恁うなると、如何に高等官でも、北部の官吏は情けなくなつて来る。北部の宿屋は官吏を喜ぶが、南部の宿屋では砂糖屋さんでなくばもてないのだ。遊廓にした處で、料理店にした處で、飲食店にした處で、砂糖屋さん萬歳の南部である。一人や二人の情人を砂糖屋さんに有たねば、南部藝者の資格ない迄にさげすまれる。南部で砂糖屋さんといへば土地で大名同様の廳長さんよりも蒙い。廳で何かあつても、街に何かあつても、小學校が新に開設されるにしても、犬と猿の相談會があつても砂糖屋さんに寄附を仰がん事はない。又砂糖屋は必ず寄附する事に定つて居る。即ち不文憲法になつてゐるのだ。其ういふ次第で、南部の勢力は砂糖屋さんである。南部の砂糖屋さんは、北部の佐久間總督に對比する勢力だ。砂糖屋さんとだけになれば、月給十五圓の小僧社員で

砂糖屋は
南部の
勢力

老妓の
精智

も、廳の廳長さんと、君僕失敬の對酌が出来たのだ。今の分で行くなら、子を生まば砂糖屋さんにしろ位の俚諺が全島に流行るかも知れん。新聞記者にした處で、政治家にした處で、教育家にした處で、宗教家にした處で、南部へ行つて、砂糖談が出来ねば赤面する、赤面するばかりでない人が相手にして呉れぬ。南部の藝者となれば、ほんの賑け出しのものすら、絞りの利く客、無心の利く客を、ローズバンブーや、絞りの利かない、無心の利かない客を在來種位は、立派にいつてのけるのだ。若し、其れ老妓にして、戰場往來の巧者に至ては、紅蔗、竹蔗の收穫量比較論もする、結晶糖や、葡萄糖の分析比較もやり兼ねない。製糖業者の始業は、毎年暑くなる迄の半年間が奮闘時代になる。到る處、丈餘の穩波十里に續く蔗園の甘蔗が、非常な速力で刈り取られたり、機械にかけて壓搾されたり、煮沸されたり、沈澱されたり、結晶されたり、そして倉庫中の物に

南部臺灣と北部臺灣

なつた時が砂糖屋さんの休業時になる。原料係を除く多くの砂糖屋
さん中、上は専務取締役から、下は甘蔗の一運搬係り迄、來期の始業迄は
全く閑散の身の上となるのである。春風春水一時來るといふのが、此
時の形容詞として最も適當だ。此時を形容するに、此以上恰當の言葉
いや文字は見當らない。「筑波山滴の田面融け初めて枯生の薄春風ぞ
咲く位では到底間に合はない。静養の爲内地へ歸るものや、長い間工
場内の汗に塗れた者が閉鎖した工場を後に、ぞろ／＼山を出る時
の光景、堤防の缺潰といはうか、洪水の氾濫といはうか、何れにしても、此
猛烈極まる同勢が、臺南に入り、臺北へ去り、乃至は彰化へ、嘉義へ、打狗へ
と云ふ如く、思ひ／＼の目的地へ蜘蛛の子を散した如く解散する。そ
うしちや、至る處で、春風春水一時來るのを盛んに發揮する。臺灣花柳
界のかき入れ時が、即ち此時だ。製糖會社数からいつても、南北兩部の臺

灣では彼是れ二十幾つかの數だ。此一會社に凡そ百人の社員が居る
としても、二十會社では二千人からになる。之に舊糖廓が二十ばかり
此一糖廓に付、廊員が五十人宛にしても、千人の多數になり、會社分の二
千に之れを加へれば、更に三千人の砂糖屋さんになる。三千人の砂糖
屋さんが、約半年間の稼ぎ溜めを懐へねち込んで山から市へ出るの
ある。出山の釋迦でない、出山の砂糖屋さんである。臺灣の大問題と
いつてもよい。

春風春水一時來る如きは、決して偶然の結果でない。此同勢が一しき
り臺灣全島の花柳界の相場を狂はせた後に至ては、宛ら野分後の荒野
の如き全島花柳界の光景だ。此潤ひを蒙る處が臺南が第一、他は著し
く程度が下るといふ事である。

悠ういふ次第で、南部は活躍の氣に満ちて居る。金づかいか荒つぱい

から金回りが随つてよい。住民としても、餘りけちな風をしない。南部人の大部分に賣るべく飾つてある、臺南の商品のばたくはけるのは、皆金まはりのいゝ爲に外ならぬ。夫かといつて、臺南附近の人は臺北あたりの人の如く、人の眼につく迄邊幅を飾つたり、守成の老人めいた因循に流れない。在來の歴史からいへば、南部臺灣の代表地臺南は京都だが、今は大阪を其れへこき交せて居る。産業發展地なる、南部臺灣の代表地としては、自然にも、人にも活氣があつて相應はしい現在だ。若し、北部臺灣の首都臺北が、人を以て誇り、臭い吏風を以て誇るならば、活氣を以て誇り、甘い砂糖屋を以て誇らねばならぬであらう。思ふに、北部臺灣の進歩は停止しかけたが、南部臺灣の進歩は是れからである。只望むのは、總督閣下の徳を此邊地に迄分配して、貪吏と奸商の結托を防いで、砂糖屋の横暴を抑へたいといふ一事である。臺灣の生命

南部臺灣の進歩

たる砂糖業に従事するからといつて何も横暴を極める必要はないのである。統治機關の所在地が、此に偏在すると、上に上官の居らんやうな態度をするにも當らない。茲に於てか、臺中遷都論が起る。

「四」臺中遷都論

南を抑へ、北を制し、而して、西に臨み、東を壓するには、勢ひ四方樞要の地點、交通便利の位置に、政治機關の根本基礎を築き上ねばならぬ。必ずしも、位置の偏在、中央の故如何を以て決すべきものでない。さりながら、全島に、鐵道全通した今日の如き、寧ろ、統治機關の實力を、當然中央部の臺中に置くが至當であらう。支那近代の人物、劉銘傳が、往年臺灣經營の一着手として、政治機關の改造を爲すに方つて、政治の中心を確定すべく言つて居る。

臺灣の疆域南北相距る七百餘里、東西近きは二百里、遠きは或は三四百里、崇山大溪、鈞速高下、從前治る處、迤山前、迤南の一線に過ぎず、故に僅に三縣を設けて餘りありき。自後榛莽日に開くる故に、屢々廳治を増して尙足らず、光緒元年沈葆楨請ふて臺北府縣を設け、以て北路を固め、又同知を卑南に移治し、以て後山を顧み、全臺の官制粗ば規模あり、然れども、時局勢ひ未だ開けず、擇要修舉、一勞永逸の計に非ざる也。臣等公同商酌、窃に謂ふ。建置の法、險と勢とを恃み、分治の道、其平を持するを貴ぶ。臺省治理内地に視れば、難しとなして、各縣幅員反て較々内地より多し。彰化、嘉義、鳳山、新竹、淡水等の縣の如き、縱横二百餘里、三百里等しからず、倉卒事あれば、輟長も及ぶなく、且防務は治臺の要領たり。境を轄する事、太だ廣ければ、耳目周くし難く、控制太だ寬ければ、聲氣多く阻つ。(中略)查するに、彰化の橋孜、圖地方は山

環り、水復し、中に平原を開き、氣象宏敞、又全臺適中の地に當る。(下略)建置の法、險と勢とを恃み、分治の道、其平を持するを貴ぶ。は動かす可らざる議論である。境を轄する事、太だ廣ければ、耳目周くし難く、控制太だ寬ければ、聲氣多く阻つ。に至ても、動かす可らざる議論である。劉銘傳は、斯様にして、新任臺灣府縣黃承乙と云ふ者と、時の統領林朝棟といふ者の協力で、省城を彰化の橋孜圖に築かせ、一方には全臺の行政區劃を革新し、更に省内を分つて、臺北、臺南、臺灣の三縣、及臺東直隸の一州に改めたが、此築城工事の半途から、又新に出來た臺北府城に、政治中心を取り去らうとした。つまりいへば、劉銘傳の中央的政治中心主義が、福建の首都と聯絡の關係上、一縣に撤回されたからだ。此理由だになければ、劉銘傳は、依然として、政治機關の中心を全臺の中央部に置いたらうと思はれる。劉辭任後の新巡撫劉友 の上書に「臺北は本島の上游

に位し、衙門庫局略ぼ成功し、商民輻湊、鐵道亦延長して、舟車の利兩つながら備はれり、故に本府縣を以て、臺灣の省城となさば、名實相符し、規模大に定まらん」とあるのは、渠れが全臺の統治策に縮小政策を取つた爲である。斯様にして、政治の中心點は、割の時代限り、今の臺中城を放れたのだ。今に尙土堆全く瓦石を疊むに至らない臺中城の荒寥を見る。割の進取的政策と、割の縮小主義とか、其殘壘を通過して見る事が出来る。又今の臺中市街を見ても、其の整然として、一絲亂れない街劃や、新に設けられたらしい溝渠やが、今の臺中としては、餘りに規模が大き過ぎると思ふ。人の踏まない草茫々の廣い道路や、住民の少い土地に於ける、あの廣大な贅澤過ぎる公園やは、何時にても、臺中が全臺の首府になりえる資格があると思ふ。若し、其れ地が狭いとすれば、尙地を四方へ十分に拓き得る。又、近くに港灣がないと云ふ難者あれば、其人は西

臺中城の荒寥

鹿港の價值

の方鹿港に修築を加へればよい事を知らん人である。全臺の經濟上から見ると鹿港は、決して輕視すべからざるものだ。今でこそ船着き場が、市街を二里も放れ、港灣の形狀を失つてゐるが、曾ては全島四大開港場を凌ぐ程の時代があつた。島内第一の米産地たる處に此港灣を其儘にして置くといふのが間違である。軍事上からいつた處で、雲烟の間に彷彿せる海軍の根據地澎湖から見ると、さまで不便の航路でない。全島の重要産物たる處の米、砂糖、樟腦、木材などの産地たる地方、それですら不正の行はれる地方を放れて、總督閣下が、全島でも濕度の多いのでは、澎湖島、社寮島に次ぐ臺北にござる必要はないのである。總督府の大事業といふべき理蕃事業の完成を期すにも、蕃務本署を中央部にあらせたいと云ふ今日だ。多年、新竹廳と臺中廳との持て餘して居る北勢蕃の鎮壓にも、亦極めて必要な事であらう。今

の臺中に根據する一部の悪辯護士連が、土人を喰ひ物にする悪風の如き些々たる事は、總督府が臺中へ移りさへすれば、地を掃つて消えてしまふ。つまりいふと、總督府が臺北に居るのは、全臺の生命たる生産地を閉却したものであつて、現在の砂糖保護政策にも背けば、此他の保護政策にも矛盾する。第一、遠い處に居て政治を聞くのが間違ひだ。政治は聞くよりも、見るべきものである。しかし内地の美人の多く居る、内地の空氣の多くする、内地便りの早く聞ける總督の好きな、内地麥酒の澤山ある、臺北が總督の御意に召してるといへば、其れ迄だ。臺中遷都論は、到底行はれない吾人只一人の説である。だが、吾人は、誠に臺北の政治的中心機關を臺中に遷した時に於ける、南北兩部に於ける、經濟上から及ぼす均等した處の、活きた色彩を、全島の住民から見たいものと切望する者。

「五」動物の臺灣耶、植物の臺灣耶

山間では鹿が主になつて居る、民間では水牛が主になつて居る。しかしながら、足一度蕃山の荆棘を分け、手一度蕃山の雲霧を披けば、其處に熊も居る、豹も居る、狼も居る、猿、野猪、兎、栗鼠、臭猫、山猫が居る。野鶉の類には、鷓鴣、鶉、鳩、山鶉、鷓、夏鷄、小鴨、鳧、豚、稀に信天翁、螺馬なども居るが、内地で見る如き馬、純然たる家畜の猫は殆ど見ない。魚類としては、鱈、松魚、鰻、鮎、鯛が主になつて居て、鯉、鮒、泥鰌等は、餘り多くない。要するに臺灣は動物の臺灣でない。牧畜業の振はんのから見ても、水産業の發達せんものから見ても、到底動物の臺灣でない。此點に於て、朝鮮植民地に及ばないやうだ。豚の飼養といへ、家鴨の家畜といへ、未だ十分に改善の餘地がある。小琉球から枋寮、東港、更に飛び飛んだ各地の沿岸に、水

産は起つても、水産組合は出来ても、會社組織で、堂々やり出したのは、基隆水産會社丈であらう。之を見ても、水産動物の貧しい事が想像し得る。今日は、只之を補ふには、漁撈に、製造に努力するより致方がない。臺灣で牛肉をと注文すれば、雪駄の皮のやうな黄牛を食はされるに極つて居る。臺灣第一流の紳士が、神戸牛なるものを見て、涎の垂れるも知らずに、遮二無二突貫するから見ても、臺灣に食牛の少い事が想像し得る。斯様に、臺灣に動物の貧しい理由は、其天然が動物の蕃殖に適さないからであらう。更に家畜に猫のやうな小動物が少くなり、内地馬のやうな馬の少いから見ても、茲に一種の疑問が起つて来る。或人は、此理由を説明して、臺灣には内地の如く、何事でも、てきぱき整理する底の敏腕な事務家が適さない、又神經過敏な事務家が適さない。要は休んでは働き、働いては休み、徐ろに氣長がに、一日中を過す丈の事務家

でなければ、到底長い間の事業は仕遂げられぬ。其證據には、臺灣で一番生命の長い、實用に適するといふ水牛の一日間といふのが、實に悠長極まるものだ。水牛は働く時によく働く、しかし眠くなり、休みたくなれば、直ぐ水に入つてごろりとなる。そうしちや、働き度なつた時に又働く。之が水牛の長壽法であると共に、臺灣の天然に適した、動物の代表的生活法である。之と反對に、神経の過敏な、餘りに伶俐過ぎる、内地馬や、猫のやうな動物は直ぐ斃れてしまう。臺灣で、長く事業をしようとするに云ふ人間が、亦此通りになるといつて居た。如何にも言はれて見ると、臺灣では、座敷飼の猫を見ないで、犬を多く見る。犬は寒地にも、熱地にも、適するからよいが、猫や、馬と同種、同性の動物は、どうしても臺灣には蕃殖しない筈だ。動物の臺灣たるを得ざる理由は、恁んな處からも生じて居る。約めていへば、臺灣は人間のやうな上等の動物初

公用の官
人は幸福

解測せる臺灣

四〇

め、下等動物の爲にも、不健康地といふことになる。之を見ても、一年中に五回も、六回も、氣候のよい内地へ歸り得る紳士や公用の官人は幸福である。十年内地の土を踏まんどか、十五年故郷の母に逢はんどか、東京で生れて、東京の電車を未だ知らんどか、架け換へられた日本橋を知らんどか云ふ小官吏になると、涙の飜れる程氣の毒になる。臺灣總督府の一部に、若し數字で公然示されない特別豫算でもあるなら、全島の小官吏に、盛夏季を限り、前後二回位に亘る休暇を與へるがよい。そうして亞熱帶地の勤務に疲れきつた渠れ等を、清涼の氣に觸れさせるがよいと思ふ。朝鮮の如き、樺太の如き寒い植民地にストーブの供給があるのに、盛暑時の灣吏には扇風器備付の恩典がない。其うかと思へば、此んな處でこそと思ふ總督官邸や、長官官邸には、幾つもの要らぬ室に迄扇風器が備つて、なくもがなと思ふストーブ迄備へてある。蕃山

灣吏と扇
風器

山に生蕃
到る處に
マラリヤ

絶頂の寒い、隘勇線の監督所などなら知らない事、耐えて居れば、冬でもネルの單衣一枚で居られる臺北の官邸あたりでのストーブは贅の骨頂と云はざるを得ん。臺灣總督府に冗費の溢れて居る事は、唯、單に此丈でも合點しうる。非政友派の一部などで、臺灣の特別會計廢止論を唱ふるのは、決して無火所無煙論でない。然らば、以上、動物に對する、臺灣の植物はどうかと見るに、曾て臺灣の植物研究に従事した歐羅巴の學者は、只「闇黒地の臺灣」と喝破した丈で、目的を十分に遂げなんだ。山に生蕃、到る處にマラリヤ熱、其れが其研究を妨げた原因もあらうけれど、領臺當時の臺灣は、兎にも角にも、植物の如きものに注意を拂ふものはなかつたのだ。其暗黒地の鍵が、帝國大學の牧野、三宅、大渡、早田などいふ學者の手に依て開かれ、其が臺灣植民地、光明界の植物研究といふ事になつたのだ。爾來臺灣の植物界は博

動物の臺灣取、植物の臺灣取

四一

物館の川上技師に依て、さまざまの研究を遂げられたが、更に又大學に於ける研究材料に供され、日本で類の少い九重桐の如き、佐久間龍膽の如き、兒玉菊の如き、長谷川草の如き、此他さまざまの植物が世に紹介された程、植物の種類に至ても、天下に誇稱すべきものが深山ある。植物統からいへば、臺灣は支那區系に屬し、從來某博士の調査せる種類系のみでも、二千六百六十種に上り、之が八百三十六屬、百五十六科に分れ、中南支那にあるもの多きを占め、次は日本内地のもの夥しく、他は、中央支那、馬來半島、印度平原、何處にもないもの、北支那にあるもの、ヒマラヤにあるもの、深太利にあるものといふ順序の分布になり、就中、何れの國にも傳はらない植物數が全島植物中の第三、四位を占めて居るぞうだ。之を見ても、臺灣が如何に植物に豊富であるか、知れる。此植物の豊富は、優に、動物の貧弱を補つて餘りがある。茲に於て、植物の臺灣とい

臺灣植物
は支那系

人體の
自然の
補ふ
自缺

ふ事がいひ得るのだ。成程臺灣の平地や、平原には、愕く程の大木がない。しかし、朝鮮植民地を見るやうな、禿山、禿野は殆んど見當らない。何時どんな處へ行つても、綠翠滴々の樹木や、草の生へてゐない處はない。臺灣の天地から、若し、家と、人と、水と、動物とを取り去つたなら、殘るものは草木のみである。之があるが故に、氷塊を噛み碎いて、半裸體になつて事務を見る盛夏の時でも、臺灣の人はさばかり暑いと思はない。つまり此の如きは、自然が、人體の缺を補ふ處の恩恵であつて、此恩恵に預る處の人は、此恩恵に酬ゆる事が必要だ。此方法に至つては、さまざまあらうけれど、先づ同種の樹木や、同性質の草木を、尙盛んに空所々々へ移植する事が肝要だらう。

總督府の苗圃が、苗木を拵へて呉れるを待つや、恒春の熱帯植物研究所の研究して呉れるを待つや、各廳下の地方税や苗圃に任せたりなんか

して居ては、島内の樹木が次第に亡びてしまふ。樹木の性質に依ては、島内の憂患たる濕氣も、瘴厲の氣も防ぐ事が出来る。豪雨時の出水も豫防し得る事が出来る。今日は島民各自の植樹心が必要になつて来た。今の如き、林野調査や、蕃界の天然林の現状や、造林計劃の進歩しない植民政治にばかり任せ置いては、臺灣固有の美しい植物が盡きてしまふ時が来る。かくては古へ船から見て、葡萄人の名つけた「フォルモサー」(美島の意味)の實が滅してしまふ事になる。何れにしても、植物本位の臺灣、遠く内地にばかり居て、一年に一度か、二度より來ない學者や、總督府の農事試験所の迂闊千萬な技師、技手連にばかり任せ置くといふのは不安心である。植民的生産物が、全島に重きを占める以上は、茲に當局が渾身の力を注ぐが當然であらうと思はれる。今日の臺灣植民地は、公園や苗圃にばかり金を散じて美しくしてゐる時でない。劍をぶ

フォルモ
サーの實

らさげた農事試験所の役人に、劍を鍔に持ち代へる勇氣がなければ、臺灣の農事改良などは覺束ないものだ。

「六」 誤解されたる臺灣

臺灣は南日本の寶庫である。「臺灣名物何々ぞ、樟腦に砂糖に烏龍茶、其れでお米が二度とれて、山に黄金の花が咲く」の俚謠一聲、簡にして能く、臺灣南、中、北部の富をいひ現はして餘蘊がない。領臺以來今日迄之を中心として活動した野心家の多くが、どれくも巨萬の富を擁し、出るに、入るに王侯の如き榮華を極めてゐるから見ても、來て拾ふ人を待つた富みが、どれ程臺灣の山野には散らばつて居たいらう。蕃界巡查をしてすら、四五年も溜れば千や、二千の金は出來た時代の臺灣を、尙夢みる者が内地には多い。臺灣へ行きさへすれば、金が往來に轉つて居

臺灣の價

誤解されたる臺灣

るものゝやうに解釋するから耐らない。僅々五十か三十の乏しい路用を持たきりの無鐵砲連が、今も臺灣に續々行く。恁ういふ手合に限つて、多少の教育があるけれど、是れぞと云ふ身に世渡りの特有技能がない。さればといつて、突然、基隆の金瓜石金山へも行けず、臭い土人へ伍して俵を引つ張る奮發心すらもなく、彼れか、是れかと、少しばかりのゆかりを便つてパンの口を捜す間には、もう宿屋の宿料が支へて動けなくなつて、結局警務課の厄介になるやうな落ちになる。其處へ行くと、職工とか、何とか身に一藝だにあれば、教育はなくても、結構身の振りかたのついて行くこと云ふのが今日の臺灣だ。即ち、臺灣を内地で誤解したからの罪である。次に内地には、又恁ういふ誤解者がある。臺灣では砂糖が盛んに出来る。砂糖業にだに關係すれば、金が面白いやうに儲かる。土木請負事業が、又其如くで、請負事業だにすれば、濡れ手で

今日の臺灣

掴む粟同然の利益があるなどは、未だ誤解の少い方だ。甚しい先生になると、生蕃も、内地人も同居し、生蕃も土匪も一つものであり、どうかすれば、往來を歩いて、も、首を斬られるものと信じて居る。生蕃智識の浅い新聞記者先生や、政治家先生や、教育家先生になると、隘勇線の何であるかを御存じない。盛夏の季節にでもなれば、焼けて、死ぬやうな苦みを聯想するらしい。

先づ、恁う誤解は、恁ういふ誤解としても、内地の政治家間では、臺灣總督府を一種の秘密的政治機關で、いもあるやうに解釋し、兒玉總督時代には、是れゝの失態があるとか、後藤長官時代には、之れゝの猫ばいがあるとか、大島長官時代には、砂糖屋と是れゝの默契があるとか、其れが傳へ傳へられて現代に及ぼしてゐるのだから、其淵縫して置く一端をだに突き崩せば、總督政治の縊縊が出るとか、新に臺灣行きでも企て、

内地政治と家府

来た政治家か、實業家でも見ると突然「どんな利権獲得がね」を浴せる向きが多い。もつと酷い輩になると、前長官や、前々長官時代には、對議會の爲に出京する都度配下の棟腕なる親近者をして、臺灣殖民政策に反抗する世の政治家とか、新聞記者とかを買嘆し、或は其口を箝して啞雙同然にする殖民地一流の應用政策を行つたとも道途で云ふ如く、しかく臺灣は、内地の者から誤解されないでもない。思ふに、此等の斷片的風評、約めていへば、佐久間總督閣下の、植民政策を妨害する誤解説は、皆んな臺灣總督府自身が、情實に纏綿したり、甲者と、乙者とに對する態度を一二にしたり、乃至は政治上の旗幟を鮮明に、透明體にしないから起る、非難の聲だとも受取れる。朝鮮植民地は、言論の自由を拘束するとか、植民政策の主義の要領を明示しないとかいふ非難の聲に包まれ、隨て非立憲總督攻撃の聲はあるが、臺灣總督府の如く、しかく怪しい眼

を以ては天下からは見られない。何故臺灣は、斯様に、天下の誤解を招いてゐるだらう。切りつめるものを切りつめ、吐き出すものを吐き出し、明示するものを明示し、展げるものを展げ終はるやうにして、天下の誤解から免れては如何と云ふ人があつた。天與の寶庫を有つ植民地總督府は、災なる哉といひ度くなる。

「七」 妙な臺灣視察の流行

臺灣航路には、六千噸からの巨船が三四隻もある。之に、尙三四千噸の船があつて、神戸からと、横濱からと交る。北部臺灣の基隆と、南部臺灣の打狗とを往復する。打狗航路の船に至ては、兎に角、神戸下ノ關、基隆間の船に至つては、何れも歐洲航路に用ゐて、今でも立派に任務を果して得る處の壯麗なる船である。であるから、五島沖がどうの、支海が

どうのといつても、乗客が船で疊ふやうな事が全くない。神戸を去つて基隆迄は海上千里もある。心弱い女や子供や老人は、以前は此航路の船を恐れ、臺灣へ来るを怖れたものだ。其れが今では、平氣で臺灣へ来て、子なり、孫なり、良人なり、父母なりと同居し得るやうになつたのも、航海が安全になつたからだ。新渡戸博士ではないが、一年増しに老人が臺灣へ殖ゑる。此老人は臺灣で出来る老人でなくて、内地から移入した老人だ。航海安全の恩惠の謝儀は、當然日本郵船と、大阪商船とが受くべきだが、此航海安全の廣告の利き目と見えて、以前は頼まれても来ない處の視察者が、臺灣へ度々来るやうになつた。其れが、多くは政治家である。普通人の餘り来ない、内地人の能く解して呉れない臺灣の隠れた實況を内地へ紹介して貰ひ、又政治上の立脚地から力も注いで貰ひたいと打喜ぶのは、唯り臺灣總督府ばかりではない。内地からの

視察者を喜ぶ情に於ては、總督府以外に、尙澤山の島民が控へて居る。然し、内地の政治的視察者を迎ふるべく特に全力を盡すものは、臺灣總督府に如くものはない。先づ、某年某日、基隆沖なる將に入港す。船から「本船は今基隆を距る何海里の沖に在り、風なく天氣晴朗にして一等船客某代議士、何々製糖會社長某氏以下二三等船客二百七十名船内遊戯に餘念なく又船内新聞を發行して賑か也、明朝何時基隆着の筈」の無線電信が、商船なり、郵船なりの基隆支店へ着き、之が又新聞へ出て總督府の眼に着くと、其代議士の宿割りがちやんと、臺北第一流の、旅人宿に設けられるのだ。又船から登つて、汽車に乗つた代議士なら、代議士が臺北停車場へ着くと、其處にも、亦總督府からの吏員が出迎する時がある。若し、此場合に、其代議士が、總督府の案内も、世話も受けずに、勝手氣儘に視察もする、宿も取るとでも言はうもんなら、總督府の錯愕は

一通りでないとも聞いて居る。天下の代議士様に禮を失ふからの故であるか、どうかは分らない。何れにしても、臺灣總督府が、天下の代議士に敬意を拂ふ事が非常なものである事は事實であるやうだ。悪口をいへば、村の太郎作が庄屋さんを迎へるやうな態度だ。斯様にして、臺灣の西も、東も御存じない、初めて視察の途に上つた代議士は「是れが民政部です」とか「之が海軍幕僚です」とか「では今日は遅いから之きりにして、明日又監獄を御案内致す」とか「農事試験場へ御同行申す」とかいはれて、唯々として只附いて歩く。總督が、長官が若し、在府中であれば、此晩か、此翌晩には交るゝ、五六の陪賓と一緒に、官邸の晩餐會と云ふのへ招待する。はるゝ、臺灣くんたり迄、視察と云ふ觸れ込みで来て、餘り知己でもない總督府から、千里異郷の夜の官邸で馳走を受けて、ちやはやされるのが亦、此種の代議士先生には光榮に感

するらしい。どうかすると、在臺北同縣人會といふものゝ企で、其代議士先生の歓迎會が開かれる事もある。其うしちや、二日、三日の間は、長官の馬車へ同乗を強いられて、總督府で都合のいゝ官衙や、學校を見せに引ッ張り廻されたり、夜は夜で、いろゝゝな人が、宿舍へ押寄せては、歓迎疲れ、視察疲れで、身體が綿の如くなつた代議士先生の頭を、益々茫然たらしめ、益々靡庫させるやうな仕掛にする事もある。恚うなつて來ると、代議士先生もう有頂天に逆上してゐるから「はあ、總督府に何か弱點があつて、恚んなに歓迎するのちや、して見ると乃公の總督府を怖れしむる威力も豪勢なものだ」位で、反り身になる。さア恚うなつたが、最後、眞面目なるべき筈の代議士先生の眼は、急に見えなくなる。耳も急に聴えずなる、鼻の臭覺すらも、次第に鈍くなつてしまふのだ。愈々臺北の視察が終へて、新竹なり、嘉義なり、臺南なり、又は打狗築港の

工事なりを見やうとしても、其土地へも親切な總督府が前以て通知して置く故、視察者の列車が驛へ着けば、大地を踏まぬ車上の視察者が、直ぐ廳の樓上なり、支廳の支廳、長室なりへ請せられ、いろ／＼な報告書を見せられたり、臺北同様、いろ／＼な建物を見せられる。其上夜に入れば、歓迎の宴といふ事になる。其うしちや、行く先々を視察に就いて之と大同小異の便宜を與へられるのだ。随つて視察するといふよりも、視察を強いられるのであるやうだ。其れも、自由、單獨の視察でなくて、囚れの視察、監視付の視察めいたことをするやうだ。其うして、豫定の視察を終へて臺北へ來ると、總督府からとして、山の如く、一括せる各種の統計的、數字的、殊に蒸し暑い時なんかに見せられては、うんざりするやうな、即ち文字に現れた臺灣總督府の事業現在を與へられるのだ。其處へ、長官の命であるとか何とかいつて、秘書官の電話が

強
ひ
ら
れ
る
視
察
者

活
字
で
拵
へ
た
視
察

頻繁にでも來ると、宿の帳場や、女中達に對する一種の見榮か何んかのつもりで、先生益々鼻を高くする。つまりいへば、此の種の視察者は、眼を塞がれ、耳を鎖され、其うして感覺を鈍鈍にされて、只た二條の鐵路と、只金卸の人と、宿屋の女と、宴會の女と、數字や、活字で拵へた丈の臺灣を視察して歸る意味にもなる。而して鐵道沿線以外の天地と、役人でない住民の内的生活の真相と、數字以外、文字以外の臺灣政治の現状とを、わざ／＼來て見殘して歸るのだ。例年の議會にも、憊ういふ代議士殿が、臺灣の豫算に何やら啄を容れては忠義振る。視察の流行もいゝが、此の如き視察振りでは、植民地住民に取つて、何の難有味もない譯だ。寧ろそのこと、總督府の報告や、統計書と、地圖でも内地へ取寄せ、歡迎會に費すところの費用も請求して、暑くない、涼しい、箱根か、日光邊りの室内視察と洒落れ込むが、ごんなに氣が利いて居るか知れん。若し、其れ、民

政長官や、總督のお聲が必要なら、其んな蓄音器が出来ないとも限らない。

「八」失敗せる糖業政策

砂糖は甘いものである。甘い糖業政策の行はれるのは致方がない。しかしながら、甘い此糖業政策の餘弊が、今日救ふべからざる状況の下にあるといへば、其罪は誰にあるであらう。約言すれば、臺灣總督府が、一般糖業者を初め、其れを中心とせる所謂露菌病者から、甘く見られたる結果が、今日の餘弊を醸したものである。露菌病者とは何者か。露菌は甘蔗の害虫である。害虫の害の怖るべきものである事は、糖業者でなくば分らぬが、吾人のいふ露菌病者は、砂糖を食物にする一種の臺灣ゴロの謂ひである。つまりいふと、糖業政策の實権を握つてゐる臺

所謂露菌病者

天下の曲事

當時の殖産局長

灣總督府に此露菌病者に等しい、一種のバチルスが付き纏つて居るのである。寛大にして、乗する處の機會を拵へた總督府が、尙依然露菌病者との關係を絶たざるに至つては、天下の曲事といはざるを得ん。願れば、當初の糖業政策は、砂糖工業の奨励時代があつた。砂糖農業奨励時代があつた。領臺後第一期の糖業改良方針に至ては、蔗種の改良を企てたり、栽培法の改善を企てたり、灌漑の利用法をしたり、荒蕪地の開墾をしたり、糖務局の設置を見たり、糖業奨励の制定をしたり、技術生の養成を試みたり、蔗苗を購入したり、試作場を設置したり、産糖組合の組織をさせたり、乃至は大規模の企業を勧誘したり、其の多くは、實に當時の殖産局長新渡戸稻造博士の建築に依つて、其然るに至つたと云ふ事だ。此點に於て、新渡戸博士は、臺灣砂糖業者の大恩人である。殊に、明治三十五年六月十四日附の律令第五號を以て發布された「臺

失敗せる糖業政策

『臺灣糖業獎勵規則』に至つては、臺灣の糖業者に取て、無限大の保護政策である。其第一條に大要恠う書いてある。

甘蔗の耕作、又は砂糖製造に従事する者を、臺灣總督府が適當と認めば、甘蔗苗費、肥料費、開墾費、灌溉費、排水費、製造機械器具費に對し、獎勵金を下附する。

尙、此外に、獎勵金に代へる現品下附、貸與の規定もあれば、總督府の定めたる數量の原料で砂糖製造をなせば補助金も與れる。甘蔗耕作の爲とあれば官有地も無償で貸下げるなどを初め、さまざま、寛大過ぐる恩典が澤山ある。此稀有なる督勵法に依て出來たのが、臺灣糖業株式會社である。之に對して臺灣總督府は、三十三年度に於て、先づ一萬二千圓の補助金を交附した。後にも、先にも、之が臺灣に於ける機械製糖の嚆矢、糖業獎勵の趣旨に依る、補助金交附の濫觴であつた。原動力が牛の力

寛大過ぐる恩典

巨額の補助金下附

で壓搾器が石車であつた原始時代の製糖法に、一新時代を劃したのも實に此時だ。續いて翌三十四年には、五萬五千七百八十圓の補助金交附があつた。此機運に促がされて出來たのが、中川製糖所、維新製糖會社、鹽水港製糖會社、新興製糖會社、臺南製糖會社などで、明治四十一年迄、一寸十箇年間の中に、八十六萬六千九百九十五圓といふ巨額の補助金を製糖業者に交附した。尙、此他南昌製糖會社を初め、三十二箇所の製糖所に對しても、機械器具の貸附を出來得る限りした。其上總督府自身が、糖務局を置いて、蔗苗の配給をしたり、模範蔗園、改良蔗園、本苗圃、母苗圃の設置をしたり、或は臺南府下大目降に糖業試驗場を設立したり、學理と實地に於て補助金交附以外の補助を極力したのである。今日其産額が五億斤に達せんとして、生産過剩の弊をすら高め、臺灣統治に要する、經常部の歳計總額三千餘萬圓の三分の一を、其消費税額に依て補

成功は唯
表面の事

解明せる臺灣

六〇

ふやうになつたのだ。其うして、世界糖産國の伍に列し得た。此點に於て、臺灣の糖業政策は、偉大なる成功といひ得るのだが、是れは、唯表面の事實丈である。裏面の事實に至ては、残念ながら、成功とはいはれない、失敗も失敗、大失敗といはねばならぬのだ。如何にも、製糖會社の數は、僅々十年ばかりの中に、非常な數になつた。産額も愕くばかりの斤量になつた。此砂糖といふものを中心にして、臺灣全島に生活するもの、數が、一日く、に殖ゑるとは云ふもの、毎年度の決算期に於て、満足な利益配當を受ける製糖會社が、どれ丈あるであらう。一方、生産過剰と云ふ聲が高く、内地で消費し餘つて、外國へ迄輸入を企てること云ふのに、爪哇糖よりも高價な砂糖を、内地人に背めさすと云ふのは分らない。聞く處に據れば、生産過剰の聲は、内地糖商團及臺灣糖業者間に於ける、一種の政策的呼び聲であつたとも傳へられて居る。何れに

生産過剰
の聲の出

製糖會社
の設立許
可

しても、此原因は糖業政策の過失であると思ふ。第一臺灣總督府の糖業保護政策は、餘りに大仕掛であつた爲に、縮小する事が出来んで居る。今日となつては、製糖會社數の多いのに、苦しめられて居る。現在の既設會社以外新規設立を許さないと云ふのも、其煩に苦しんで居る證據と見て、差支へがない。つまりいへば、糖業會社の濫設立を許した傾きがある。濫設立を許したに就いては、種々な政治上の情實も伴つて居る。實際に於て、其會社の存立し得ない事情を知りつゝ、其土地が、砂糖製造に適するか適さないかも構はず設立認可をしたなども、澤山ある。會社は出来ても、工場がまだ出来ず、工場が出来ても、十分の成績の未だ上らないで、二つも、三つもの會社の合併するなども、昨今はある。之といふのも、全島統治の基礎となるべき糖業政策を、一種の流行物扱ひにした結果であつて、此責任は、當然今の臺灣總

失敗せる糖業政策

六一

督佐久間左馬太閣下が受くべきである。一度此情實に依て、事の左右される事が内地に聞えた時、内地の野心家連は雀躍して喜んだ。其うしては、臺灣の地を一度も踏んだ事も、何もない人迄が、どしどし、新設立の製糖會社の株主になる。遂には視察といふ名義で渡臺する、渡臺しては總督府に當つて見る。當つて情實を匂はせる、匂はせて置いて今度は、二回も、三回も足近く度々視察の途に就く。そして一種放れ難い關係を臺灣總督府へ結びつけ、更に第二の關係をつけ初める。彼の砂糖を中心として衣食する露菌病者中には、此種のゴロツキが頗る多い。代議士で候の實業家で候のと云ふ著名な人物に、之が多いのに愕かされる。其れも、之も、臺灣總督府の糖業政策に、大なる空隙があつたからである。大なる缺陷があつたからである。

第二の糖業政策の失敗は、甘蔗栽培地として適さない、製糖會社設立の

匂はせる
情實

北部は砂
糖地でない

地として適さない、北部臺灣に製糖會社の設立を許した點である。勿論北部臺灣が、甘蔗栽培地として、製糖會社設立地としての適不適は、人に依て、さまざまの説をなすが、要するに、不適當なる土地である。第一南部よりも氣候が寒冷である、又甘蔗の成熟期に雨量が多いので、砂糖の歩溜りが多くない。甘蔗耕作に適する氣温が、攝氏平均二十度で足りるといふから見ると、臺北の平均温度二十一度五分は足り過ぎて十分である筈だが、事實は之を打消して餘りある。即ち、甘蔗成熟期の寒暖に至つては、二十度以下の事が極めて多い。ある者は、南部に適さない、チエレボンといふ種の甘蔗を植ゑて、施肥と灌漑、排水に注意すれば、敢て南部に劣らないと云つて無理な辯護をするが、此又辯護が極めてあてにならない辯護である。故に實際の臺灣を知らんで、臺北製糖のやうな、新製糖會社に資金を投ずるものがあれば、其れば、たまされであ

北部臺灣
は茶の産
地也

る。斯様に、北部臺灣に製糖會社を興して不利といふのが分つて居て興すのだから、其處に又何等かの曰くがなくてはならん事になる。斷つて置くが、昔から南部臺灣は茶の産地、中部臺灣は米の産地、南部臺灣は砂糖の産地である。

矛盾せる
産米改良
法

就中、中部臺灣の米に至ては、臺灣の主要なる産物の一つで、砂糖や茶や樟腦等の奨励法同様、大に奨励法に據らねばならんものである。然るに、砂糖政策の爲に、現に行はれつゝある其産米改良法なるものが破壊されて居る。只破壊されてる丈は分らんが、糖業保護政策の餘弊が同じ總督府から出る産米改良に就いての奨励法に矛盾するから滑稽だ。第一、全島米を代表する、中部臺灣に、砂糖會社の設立を許すのが間違だ。之を従來米作に依て、大部分の生活を續けて居た土人に聽く。命令なれば甘蔗の栽培も致方がない、しかし、従來の米作を抛たせて迄の強制

甘蔗の強
制栽培

栽培は無理である。米を作れば、一年に二度の収益が揚る、甘蔗では一度より揚らない。只單に此點から見た丈でも、甘蔗の強制栽培は困るといつて彼等は泣いて居る。又事實、現に、中部米の産地の中央部とも云べき、臺中、彰化を中心とする高島、小金治等の新高製糖會社に至ては、強制裁培を土人に強いて、承知せぬ時は、之を保護する當該官憲から巡查が來て、其應じない栽培者を拘引して牢に入れ、官憲の威力を以て之を鞭撻し、之を威嚇すると云ふ事もあるそうだが、之が眞に事實であるとせば、聖代の大怪事といはざるを得ぬ。吾人は此事實の虚報である事を祈るものだが、其聲の次第く高まるのはどう云ふ譯だらう。斯様にして、若し、中部臺灣の米の産額が逐次減少する時に於ては、同じ官憲の發する糖業政策と、産米改良政策とが大衝突をなす事になる。之を糖業政策の過失といはずに、何と云ふ事が出来る。要するに、臺灣

聖代の大
怪事

總督府の糖業政策は、外形に於て成功してゐても、内容に於て大失敗を招いて居る。糖業者を保護する問題にのみ腐心し、大切な民の問題を忘れ、大切な米産奨励の問題を忘れ、其うして罪のない人民を苦めて居るのである。其んなら、斯様に無上の保護を受ける、大倉組を意味する、新高製糖會社の成績が、臺總督府にどれ丈の貢獻をなすか、全島經濟界の上に、どれ丈の貢獻を爲すかと云ふに至ると、筆を投じて、茫然自失せざるを得ん事になる。若し、其れ、長いものには巻かれる主義が、いゝとなれば、大倉組も長い、臺灣總督府も長い。巻かれる耕作者は、只黙つて働いて、泣いて知らざる態で暮らさねばならん譯になる。何れにしても、表面に、成功を謳はれつゝある糖業政策の下に、此新現象が面白ではないか。

長いもの
には巻
れる

「九」 後藤新平式色彩

新平後藤男の色彩を、最も能く體現したのが臺灣である。幾度長官は代つても、幾度總督は代つても、臺灣在住官民で後藤男を口にしない者は一人もない。一寸人が三人寄りさへすれば、『後藤さんの時の宴會はこうであつた』を話し合ふ、乃至は、其人の性行を語り合ふ、乃至は其人の選した事業の跡を語り合ふ。又之を語り得ない者であれば、臺灣在住官民でない位、肩身が狭い。朝な夕なに、客に媚を賣つて、金力と、權勢とに左右されるを當然と解する藝者ですら、『後藤さん』を語り得ない者は、巾が利かないやうになつて居る。臺灣に總督といふ總督、民政長官と云ふ民政長官は、是迄人物が幾度交はり代つて就任して居てもより多く、尙其名を繰返される點に於て、『後藤さん』は第一位であ

後藤さん

らう。民政長官としては、水野といふ人も居た、祝といふ人も居た、大島といふ人も居た、曾根と云ふ人も居た。しかし、最も多く其名を繰返され、最も多く島の官民に記憶されて居るのが、後藤新平なるに至ては、後藤新平も、亦馬鹿に出来ない人物である事が合點しうる。先づ、何故斯様に『後藤さん』なる者の印象が深く臺灣全島へ残つてゐるかといへば、其後藤さんが、派手好きであつたからだ。派手好きの結果として、後藤さんは、さまざまの奇蹟を臺灣へ残して居る。其残した奇蹟が、悉くと迄はいかんでも、八分八厘迄が今の臺灣の色彩になつて居る。臺灣全島の首府臺北に於て、殊に其然る事が知れる。兒玉總督がごうの大島久滿次がごうだつたと云つた處で、男後藤新平程臺灣に根を生はして去つたものは、恐らくない。彼の吝嗇きんさく坊ばうな臺灣土人が、男去つて後何年かになる四十四年の夏季中、臺北の新公園に、男の銅像を建てたのから

後藤さん
の遺蹟
奇蹟したん

見ても、男が如何に八方へ愛嬌を振り蒔いて置いたか、知れる。此又銅像は、本人自身も未だ見ては居ない。臺灣を領有してから十八年程になるが、恁ういふ破天荒な事を土人にされたのは、代々の總督、長官中、男一人きりであらう。恁うなるも、煮ても、焼いても、喰へないあの土人に對し、男がどんな操縦法を用ゐたかが調べて見度なる。だが、何れかといへば、大きくやる代り、男の計劃した事には、多くの缺陷があつた。缺陷といへば、語弊あるが、さまざまの遣り繰り算段も、つと適切にいへば、胡麻化した會計があつたと云ふ事だ。臺灣縦貫鐵道既定豫算二千八百八十萬圓から、百二十一萬四千九百五十五圓の剩餘を拵へ、其うして、淡水線十三哩七分、鳳山線の十哩六分を完成した上、打狗港の埋立もすれば、基隆停車場の擴張もする、其上、今の臺北停車場前へ、なくもがななの時の鐵道部長長谷川謹介の銅像を建てた。臺灣名物として、現在に

有名な鐵道ホテルなどを拵へるに至つては、其胡麻化し法の巧妙に愕かざるを得ない。此點になると、唯後藤男得意の壇上で、他人の模倣を許さない。其れかといつて、此豫算外の企業に於ける冗費を他に濫費したとはいはぬ。何れにしても、男後藤新平でなければ出來ない藝當である。後藤のやる事する事は、總て規模が大きくて、總て事が華やかで、誰れが見ても美しく見えたのだ。今日に於て、尙全島人が「後藤さん」を繰返して止まないのは、畢竟斯ういふ事から來たものであらう。左様かと思ふと、當年の後藤新平は、極めて平民的であつて、或時は官邸に居ても、番生のやうな生活を好んでもするし、臺北市内の一市人に對しても、其處に何等の階級的區別をせなんだとも傳へられて居る。或者は、之を見玉の背後に隠れた後藤が、自分を天下に賣り出す爲、さまざまの附け景氣をしたり、さまざまの芝居を仕組んだのだといつて

居る。何れにしても、在臺人は、後藤新平を神様扱ひにせんばかりである。隨て臺灣に於ける、總ての色彩は、殆んど後藤新平式色彩にかぶれて居る。又後藤臭の空氣が實際に今の臺灣全島を包んで動かない。其ういふと、現民政長官内田嘉吉は怒るかも知れんが、是が又實際だから致方がない。内田現民政長官自身が、亦後藤色の雰圍氣中から出て居るのである。今の西園寺内閣が、何の斯んのと云つた處で、臺灣に於ける後藤色の空氣は、一寸取り除く事が難いであらう。又後藤新平の民政長官時代は、議會開會中の上京時でも、可なり飛放れた政治家操縦策を施し、其上本人自身も、亦民政長官の年俸位では、所詮定りない程度の贅を盡したといはれて居る。隨て、宿瘤の如く時代に依て出來た、さまざまの情實が、臺灣總督府對政治屋といふ關係になり、誰も知る如き謹直な親任者内田長官に迄及ぼして居るのだともいは

れて居る。かの糖業政策の如きでもか、已に獎勵時代を經過した今日迄、尙存續する義務があるのだともいはれて居る。斯る點に就いての疑問は、臺灣を考へ、後藤新平を思ふ時、必ず浮んで來る疑問である。多くの政治家はいつて居た。後藤新平に對しても一つ疑問であるのは、彼れが臺灣に民政長官たる時代の食客の多き宛然として孟嘗君に三千の食客ありし當時を偲ばしむる趣きがあつたといふに拘はず、彼れが一民政長官の収入を以て、其れを平然養ひ得たと云ふ一事である。是が亦現に臺灣では奇蹟の一つになつて、後藤式色彩を助長するに與つて力あるから面白い。も一つ、後藤新平が臺灣に残した奇蹟をいふが、其れは評判の彩票發行である。此彩票發行位、能く後藤新平の人となりを説明したものは餘りない。つまり、彩票發行の目的は彼等が年々天財票と稱する彼の馬尼刺及南清の富籤に巨額の資金を海外に放

後藤新平の
人物を
説明する
彩票

後藤式
彩票の
運命

散する弊を矯めると共に、外國發行の富籤を禁止すると共に、政府發行の富籤を以てし、其うして島内の資金流失を防ぐ爲であつた。又一方には之を經費補填の一財源に充てやうとしたのである。茲に於てか、律令第七號を以て彩票發行の規程を公布し、公然と富籤を行つたのだから喫驚する。其うして、第一次には、總額十五萬圓餘りの富籤を發行し、第二次には、二十二萬四千九百九十五圓を發行し、第三次には、殆んど第二次同額を發行し、第五次には、三十七萬五千九百五十圓を發行したる程、臺灣彩票の評判が高まつて、將に第六次を發行しやうとする時に當り、俄然此發行中止の告示が出て、後藤式彩票の運命は、脆くも茲に於て倒れたのだ。さしもに盛んであつた此官許賭博やうのものか、どうして中止されたかといふと、其初め、島内の土人の射倖心を利用して、資金の海外流出を防がうとした其れが、非常な勢ひで對岸の南清に及ば

し、一面には内地の到る處に及ぼし、草董野人ですら、彩票當籤の射倖心を起すといふ如き、一種の怖るべき射倖心を助長し、延いて之か内地の經濟界に及ぼしたから耐らない。四方から、彩票發行を非難する聲が、蚊蚊の唸るやうな光景だ。其處で中央政府の嚴命か、遂に之を中止せしめたものである。今でも元の彩票局であつた、今の臺北の博物館へ行くと、階下の一室に、當年の名残を留め、鐵骨眞鍮製網張圓形の回轉式抽籤器か、拂はぬ塵埃に埋れなから、當年の後藤新平を語つて居る。後藤新平が、時々突起な事をするのは、此一事を以てしても證明し得る如何に、内地の如く秩序立たぬ植民地とはいへ、條官許を以て、賭博公許令を發したのは、後藤新平以外の人には出來ない事だらう。渠れは萬事か恚ういふ遣り口で、島民に接近した。若し、人あり、臺灣に、より以上の發展を希望するなれば、吾人は、無遠慮に後藤式色彩の絶無になつた

後藤式色彩の絶無なる時

時を證言する。そうして今日尙、後藤式色彩に、必ず情實の隨伴する事を考へ及ぼしなば總ての消息は、自然と融解するの時が来る。要するに、臺灣は尙、後藤新平の金城鐵壁である。其勢力は、半平として抜くべからざるものがある。島の首要産物樟腦の香が如何に芳烈でも、後藤式色彩の影響から洩れる事は、決して出來ないのだ。

後藤新平が、臺灣民政長官を罷めたのは、去る三十九年の十一月だから一寸もう六年許になる。其れからして、祝辰巳も來れば、現長官内田嘉吉も來るといふ如く、本來なれば臺灣は後藤の臭みを脱してもよいのである。後藤としても、臺灣の臭みを脱してもいゝ頃である。處か何ぞ知らん、臺灣か後藤の臭みを脱せんのか、後藤が臺灣の臭みを脱せんのかは知らんか、今日の臺灣總督府は、殆んど一野の人、後藤新平に動かされて居る傾きがある。民官の重なる事業界が亦其れだ。此消息を

知つた者で、臺灣へ来る者は、必ず後藤新平の紹介状を持つて来るか、其御聲懸りを光榮としつゝ渡臺する。又其うもしなくては、實際臺灣へ来て何も出来た話でない。只前民政長官大島久滿次のみが、後藤系に桔杭したが、此桔杭したのが、遂に大島の敗北になつた。其うして今日では、大島系なる官吏系が殆んど其根を臺灣に絶ち盡す如き有様になつた。之を見ても、臺灣に於ける、後藤系の勢力が判明になる。後藤新平は、遞相を罷め鐵道院總裁を退いて、高等浪人はして居るものゝ臺灣といふものの弗箱を控へ、臺灣總督府といふものの實權を、内地に居て左右するから、遞信大臣として、臺閣に列する、よりも餘程暢氣でよからうと云ふ者があつた。

「七」 お祭り騒ぎの鐵道全通式

臺灣の鐵道は、我領有以前、已に當時の臺灣巡撫劉銘傳に依て起工されて居つた。先づ初めに出来たのが、臺北基隆間の二十哩、其れが六七年経つて、臺北新竹間が出来た。計劃は尙之に停らず、盛んに延長して、西海岸から、南部臺灣へ達するやうに企てたが、惜い哉半途にして止めた。即ち、此後を引受けたるが、我第一次臺灣總督府であつた。之が明治二十八年六月である。東西南北尙敵地である其處で、始政式を擧げた位の時だから、鐵道線路の如きには、敵が屢々出沒する其處にも、此處にも累々たる死屍がある。其うかと思ふと、一方には、山なす軍需品が山積して動かない。其處で線路を繕つたり、線路の屍骸を取除けたり、辛うして試運轉、丈はしたものゝ、臺北から、新竹間の近距離を一日掛りで進行し、而かも、多くの人夫が此後押をした珍談がある。どうがするど、進行途中を、一頭の水牛に遮られて、進むも、退くも出来ぬやうな滑稽

な事もあつた。其れか其れから、一寸十二三年ばかりの間に、新竹中港間が出来、中港苗栗間が出来、苗栗三叉河間が出来、三叉河後里庄間が出来るといふ如く、今の三驛若くは四五驛位の短距離々の竣工か積んで遂に臺南を経て、打狗に至る二百四十七哩の幹線と、淡水線十三哩七分、鳳山線十哩六分とか出来、三十九輛の機關車と、九十五輛の貨車とか、曾て新竹臺北間一日行程であつた其れを、基隆、打狗の南部北端が一日行程といふ如くなつたのだ。其うして、其開通式を擧げたのが、去る四十四年の十月二十四日である。何かさて臺灣で、初めての縦貫鐵道の全通式、時の民政長官大島久滿次の如きは、此島内空前の式に空前の催をなすべく、式のある二月も、三月も半年も前から其準備に苦心した。此結果、はるく内地から閑院宮殿下の臺臨を乞ひ奉り、其上、内地朝野の貴紳名士を初め、天下の新聞雜誌記者凡て數百名を南日本の常夏

島内空前の鐵道開通式

微風に鮮やかに飾り

島へ招待した。上に皇室を代表する皇族殿下の御出まし遊ばさるゝいふ勢ひだから、招待たれたる貴族院議員や、衆議院議員や、荷も臺灣にゆかり深き朝野の名士、新聞記者は、其日を晴れと着飾つて皆其行旅に就いた。而かも、宮殿の御召艦としては、軍艦姉川を以て之に充てさせられ、他に尙數千噸からの巨船か、内地遠來の珍客を乗せて、椰子の實熟る高山國の基隆へと着船し、岸壁を一哩放れた處へ投錨した。艦上に翻へる金色の親王旗、微風に揺ぐ鮮かな滿艦飾、發一發、烟火半空に開いて、囀の譜の湧き立つ時、臺灣總督佐久間左馬太以下の文武官僚を載せた數隻のランチが御召艦に閑院宮殿下を迎ひ奉つた。同時に海波に響き、山岳を震動さすばかりの祝砲が、間を置いて艦上から放たれる。其うして、殿下初め、一般内地の珍客は、島の官民の萬歳聲裡に上陸して、基隆から汽車へ乗ると、其着いた處が臺北、其れが十月の二十二日にな

お祭り騒ぎの鐵道全通式

る。同停車場に於ける官民の歓迎が又素敵に仰山なものであつた。之に付き、親しく此光榮ある式に臨んだ、當時の太陽記者の報ずる處を紹介して見やう。

内地からの來着の賓客は、總て二百餘人、盡く一人乃至二人に一室づいの旅宿を準備し、旅館若くは割烹店、借は一個人の家に宿り者しにも盡く新調の絹夜具を備へ、出入に専用的人力車を準備し、尙ほ宿舍々々又は總督府吏員の宿舍係りが日夜詰り切て用を聞くなど、其の用意の周到なる、痒い處へ手の届くと云ふも未だ足らず。實に今回の總督府が來賓款待の設備は吾人從來未だ其例を知らざる處なり。と、雜誌記者としては、日本でも可なり、元老の部分である坪谷善四郎が、吾人從來其例を知らざる處なりと喫驚して居るから見ても、其款待方法が常賊外れて仰山であつた事を見るやうだ。殊に二百人からの

常賊外れ
た款待法

來賓の爲、悉く新調の絹夜具を備へたと云ふに至ては、王者を待つ處の禮に異らない。吾人は此夜金枝玉葉の御身たる閑院宮殿下が、何を召して御寝なされたかを忍察し奉る。通常の賓客に、新調の絹夜具と云ふのだから、皇族殿下に何を召させ奉つたかは、吾人がどうしても起さざるを得ざる處の疑問である。同記者は又更に、當時の殿下奉迎の光景を書いて云つて居る。

鐵道開通式に、殿下奉迎の準備として、中流以上の内地人の婦人といふ婦人に、何れも白襟の新衣に、帯をも新調したるらしく、停車場に殿下御着車の時など、路傍の兩側に連なる紋章は、正に是れ綺羅星の如く、蹴返す裾模様は、流霞よりも鮮か也。中には、金巾地質の質素なるも見ゆれど、良人の御散財は察するに餘りあり。

恁うなつて來ると、お祭り騒ぎになつて來て、寧ろ馬鹿々々しい感じが

お祭り騒ぎの鐵道開通式

官設で枕
席の塵を
拭きたる

して来るやうだ。其れを平氣でさせて居た佐久間總督の人物も大きいが大島民政長官の人物も變つて居て、呆れ度も、呆れられない事になる。更に驚き入るのは、此二百人からの賓客に、接待係の官民が幹旋したとかで、一人宛の異性の者を枕席に侍らしめ、其又經費が悉く公の接待費中に含まれ居ると云ふ事も聞いて居る。之は現に侍つた者からも聞いて居る。又同記者は、臺中に於ける、鐵道全通式の光景其他をも又盛況の極であると報じてゐる。

大食堂の光景一言以て之を覆へば、「非常の盛會」の五字にて盡すべく、若し之に幾度の潤色を施さば、數萬言を費すも足らず(中略)此夜公園に大仕掛煙火と提灯行列とあり、殿下また親臨し給ふ。池の周圍一哩餘の間、提灯行列にて圓形を畫きし美觀と、十數本の仕掛煙火を一齊に池畔にて發火したる壯觀とは、思ひ切つたる大規模に嘆服

當局者
上の苦接

す(中略)打拘港の船中宴に臨めば、紅白の幕を引き廻したる五隻の大屋形船を列ねて、一大宴席となし、船毎に食卓を連ね、臺南と、打拘の内、地蕨者は、酒間を幹旋し、水上には土人の藝者、活人喬と、漁夫曳網とあり。餘興前後應接に遑あらず、中にも殊に感じたるは、此の酷暑中、料理の最も新鮮なることとす。聞けば今朝に至りては庖丁に上せしめたるなりとぞ。當局者か何から何迄の苦心、推測するに堪へたり。斯くの如くにして、臺灣縦貫鐵道全通式は、内地遠來の珍客をして、其規模の思ひきつて大きいのと、設備の至れり、盡せりの點に於て、一言不平の聲を發せしめなんだと云ふ事だが、何れにしても、どうして、臺灣總督府が、あれ丈立派な設備と、完全な接待法を盡したかと聞くと、何ぞ知らん、其れが、臺灣縦貫鐵道全通式經費として、議會の間體に上つたのだ。其金額にしかとした記憶はないが、何でも表面に現れたもの丈でも三

萬五千圓とか、四萬五千圓とか云ふので、鐵道全通式經費としては空前の巨額であつたさうだ。そうして、此屍拭ひは、後任者たる今の内田民政長官がしたのである。議會も、いゝ鹽梅に之を通過したけれど、若しも通過前に、如上の内容殊に官費を以て、異性の者を、賓客の枕席に侍らせたと云ふ事でも知れたら、恐らく内田民政長官は議會の政府委員席で、立往生を遂げたかも知れん。臺灣總督府の遣り法が無鐵砲で、向ふ見ずで、母國の財政にも構はず、どん／＼遣つといて、さてどうしやうと云ふのだから耐つたものでない。其れであつて、特別會計廢止の聲でも、聞くに直ぐびくつくから可笑しくなる。唯、獨り氣の毒なのが、現民政長官の内田嘉吉ある。前代や、前々々代だから、臺灣が内地人に誤解されてる處へ、さまざまな情實が出来て居て、其累が皆現在に及び、臺灣縦貫鐵道全通式費用の如き、馬鹿騷ぎの屍拭ひ迄もさせられ、其うして

天下非難の聲を、一身に集めてゐるのは、可愛いさうである。其處へ行くと、佐久間總督は、暢氣極つたものだ。

「十一」吏員に滿ちたる臺灣の

鐵道及鐵道ホテル

官吏の都である以上は、吏員尙忍ぶべしである。しかし、營業を意味する鐵道や、ホテルに迄、官營の實を殊更に發揮しつゝあるのは面白くない。臺灣の縦貫鐵道は、第一に其切符賣の女からして、癢に障る程無愛憎だ。其上改札が、又無愛憎で、内地人と、本島人と、此他の人種とに著しく分け隔てをした上、官吏と、非官吏とに依て其取扱ひを別にする。少し時間でも後れて、プラットホームへでも駆け込まうものなら、殆んど突飛さんばかりに、叱つて、罵つて、乗者に客車へ押込め乗せをさせる。

こうなると、何の事は、乗客か四人扱ひを受けるやうなものだ。定規の貨銀を拂つて、時間一ばいに乗つたとて之れだから、少し氣概のある乗客だと、直ぐ此不親切極まる驛夫に喰つて懸り度なる。之か、亦當然の人情だ。其處で、先づ其者が、其う迄して、漸辛つと二等室へ乗り込んだすると、どんな場合にでもゐる、臺灣總督府を表章する金釦のお役人さんの五人や、十人が吾れは顔に控へて居て、屹度傲慢極まる態度をしてござる。乗つた者が、尙疥癩の蟲を耐へて乗つてると、列車が基隆なり、臺北なりを去つた三四哩の處から、列車ボーイが來て、一々乗客にスリッパを進めて廻る。其又進め法が、臺灣鐵道獨特の方法だから癪に障る。先づ第一には、三つ釦の人に其れを進め、其次に二つ釦の人に進め、其次に一つ釦の人に進め、其うして、官吏側の乗客に全部進め終つた時、今度は服裝の比較的立派なもの、官吏と馴々しく話でもしてゐる者

に進め、甚しい奴になると、官吏以外の者に進めぬ事がある。如何に、官權萬能主義の臺灣の鐵道でも、之丈は少し不都合であると思ふ。臺灣在住者なれば、兎に角、内地新來の乗客には、之か又妙に頭へ響く。だから、氣の早い内地人なんかであるとせば、臺灣の鐵道を見た丈で、臺灣統治方針の惡聲を放たんとも限らない。長途の旅行者、例へば、基隆なり臺北邊からなり乗つて、臺南なり、打拘なり行く人、又は此方面から、反對に北行する人に取つての不愉快は、列車のボーイの不親切も一原因だが、便乗者らしい官吏の吾物顔が鼻につく。列車の速力のまぬ、いは是非ないとしても、此等の直ぐ改善し得る事丈は、どうしても改善したいと思ふ。然らざれば、初めて臺灣を見る人の眼からさまざまの誤解が起らんとも限らない。つまり、先づ内地の鐵道院の半分位もいゝから、營業と云ふ頭に、驛員、列車員全體かなればよいのである。

其れから臺灣の停車場には、貴賓室のやうな、無用な、結構な一室がある。之には、總督が、民政長官が、此隨行者でなければ昇られない。平生は、どうなつてゐるかといふに、階段の上り口へ持つていつて、鐵鎖を施し、其れへ「猥りに昇る可らず」の意味の下げ札が附て居る。此猥りに昇る可らずが振つて居る。猥りに昇らねばいゝのだから、稀に、時々昇るのは、差支へがないにも受取れる。何れにしても、此鐵鎖の隔てか氣に喰はない。これちや、何の事はない昇り度ば、總督が、民政長官が、其従者になれの謎とよりしか受取れない。總督や、民政長官が、權威を保つ爲、一般乗客と區別する爲だといへば、其れ迄だが、島内の秩序だつた今日、其れ程迄に王者の態度を執らなくもよろしいと思はれる。一年に五度か、六度かより用ゐない、あんな無用の室を、其儘置くより、其一部丈でもいゝから一般乗客の爲、何等かの設備をなすやうにして貰ひたい。

臺北停車場
の上無
用の一室

臺北に
過ぎた
ホテル

又、鐵道ホテルにした處で、普通の人は行けない處の如くなつて居る。官營の旅人宿だから、無論其傾向の絶無は不可能だが、今の通りでは、餘りに官臭近くて困る。第一あの立派な建物を、縦貫鐵道建築豫算費中の四十萬圓を以て建てたと云ふ奮發が、己に間違ひだ。金が餘つて遣ひきれなくば、他に有用な用途はいくらでもある。ホテルに輪奐の美を誇るには、未だ十年も、三十年も早い。今日の處、臺灣總督府が保護して、全島の誇りとして旅人に示す此ホテルは、蕃界に未だ銃聲を絶たない臺灣には、過ぎた一大贅物である。聞く處に據れば、毎年、毎月、其營業に於て非常な缺損があるそうだ。其んなら其損が何處から出た金で填めるかといふ點になつた時、當局者が之に對つて何と答へるか、見物である。忌憚なくいへば、臺北の鐵道ホテルは、臺灣總督府の厄介物である。尙厄介物としつゝ、此缺損の補填をするとか云ふ總督府は

將來のホテルを何とする考へであらう。民間に拂ひ下げるなり又はホテル以外の有用建物として使用するのが、先づ當面の問題の如く考へられる何の事はない、今の儘で解釋すると臺灣總督府佐久間左馬太が旅人宿兼西洋料理を開業して、合はない算盤に苦んでゐると云ふ事になる。臺北市からあの鐵道ホテルのなくなるのは惜しいが、現在の儘にして置くのは尙惜しい、あの宏壯な内部の輝ける母國にすら、殆んど見ない處のホテルを見ると、暴政回顧の念に打たれると、内地のさる政治家が評して居た。あれがなくなつたとて、臺北人は、さばかりの不便や、不自由は感ぜない。強いていへば、只島の誇りのなくなる、一つの寂しき位なものであらう。

「十二」 佐久間總督閣下

今の臺灣總督の佐久間左馬太閣下は、天下好々爺の一人だ。萬事下僚任せである。此點に行くところ、何んにも七六づかしい、寺内朝鮮非立憲ひんなどよりは、遙に愛する點が多い。先づ、臺灣全島の政權を一手に掌握する、總督佐久間閣下が、常にどんな生活をされ、どんな統治振りをされてるかを書くのも一興だ。臺北停車場へ降りたら、俥を東門の總督官邸といつて奔らせれば、内地語の未だ覺束ない土人車夫どもが、直ぐ棍棒を其方向へ上げて奔り出す。奔り出すはいゝが、俥の棍棒を十人が九人迄は、嚴いしい歩哨や、衛兵の控へ居る門前の相思樹下へ卸してしまふ。『おい此處へ卸しちやいかん、玄關迄挽いてくんだぞ』で、漸く車上の儘で玄關へ『頼まう』の人になり得るのだ。仰げば雲に聳えた石の家、相思樹や、樟の防風樹や、廣いぐるりを大きい石塀で圍ませた、宏壯なる全島一の大官邸、此處にして、總督が全島四百萬に近い民に政令を

布くのだなど思ふと、何かなしに難有い心地になる。然るに、此宏壯な大官邸が、臺灣名物の白蟻に襲はれてると云ふので、目下尙此以上大官邸の建築工事中であるそうなる。

官邸の事は兎に角、佐久間左馬太が、毎日の日課を一寸いふなれば、人の應接、文書の檢閲、施政方針の打合せ位が重なるもの、其れとても、民政長官なり、幕僚なりが、知らぬ間にちやんと拵へて置いて、其れを見て見て下いとか、よければ、印を捺して下さいとかの事で、いば、小供にも出来るやうな事だ。忙しいといへば、忙しいともいへる。閑散といへば、閑散ともいへるのが、總督佐久間左馬太の一日だ。屬僚の咄に聞くと、公務以外の食物、娛樂などに就いて六づかしい事は餘り言はないが、文書の檢閲が綿密だといふ事である。先づ秘書官なり、海陸軍の幕僚なりから、閱覽して貰ふ處の文書を差出したとすれば、袴を穿いて居ぬ時は、直

佐久間總督
佐久間總督

總督の寵
人は何者

ぐ其を穿き羽織なしで居る時は直ぐ羽織を着て其れに對つて、一枚々々に繰りひろげ、其うしてよいと云ふ時になつて、始めてびたり印を捺す。之丈はどんな忙しい時でも變らないさうだ。其うしちや、此間々に、地方廳からの面會者や、民間の有志者などに逢つて、さまざまの應接はするもの、風なく、空麗かな日には、烏打帽の平民姿になつて、寵愛の者と一緒に魚籃提げて、淡水河畔に臨む古亭庄なる臺北の町端れへ釣魚と洒落のめさる。臺北の小供は、此日を特に總督日和と申上げて居る。又聞く處に據れば、此又寵愛の者が、例の評判のよくない、督府の御用商人たる賀田金三郎の周旋であるといはれて居る。一家族を皆内地へ置き、只一人古稀に近い老體を以て、亞熱帶地の全政治を見て居る人としては、半夜人已に定つた時寂寥を覺える事もあらう。一人や、二人寵愛の者を左右へ置いたとて、其れは非難するにも當らぬか、只

賀田金のやうな人格の零こぼれな人物から周旋されたのが總督のぬかりである。總督のやうな結構人が賀田金とどうこの關係ない事は知る人には分つてゝも、一般の世人が此消息を知らぬ時、佐久間總督は何と辯解してのける。此點丈は呉れくも臺灣總督佐久間左馬太の爲に惜む。斯んな具合に、佐久間左馬太位、無頓着に、是非論の多い植民地に總督として、平然たる人物は恐らくない。神經過敏な人間には、所詮耐えられない事だ、厳格な意味からいへば、佐久間臺灣總督は、現代の空氣以外の人で、議會がどうの、日本の立憲政治がどうといった處で、其んな事の分る入物ない。總督としては、今日無事太平に勤めつゝあるのも、長閑である關係もあるが、代々の民政長官が、獨りで骨を折つて、總督のやる分迄も働くからあれで済んくと云ふ口善くち惡がない者もあつた。又ある消息通の談には、佐久間左馬太が、愈々任に臺灣へ行かうとする

總督は現代の空氣以外の人

自分では自分と解す
佐久間左馬太

時「俺には總督なんちう事は勤まらんが、後藤新平が一切やるから只行つとればいゝと云ふ事だから行くんだな」を、うっかり口滑べらしたとも聞いて居る。佐久間佐馬太としては、或は此位の事を人他に洩したかも分らない。兎にも角にも、佐久間左馬太の人物は、餘りにぼう—ツとして、ものを考へてゐるのか、考へてゐないのか、ものを知つてゐるのか、知つてないのか分らん程である。其處へ持つて來て、あの大きい躰軀で、體量ですら二十貫目からあるから、土人や、生蕃などの中へ出て、何かいふ時丈は、如何にも威嚴があつて、押出しか立派で頼母しい。若し、此人に取柄があるなら、此のやうな點を第一として、正直である、事眞面目である、事部下が不正を働いてゐても、其れの分らない如く寛容な事、自分で自分を能く解して居る位なものだらう。此自分で自分を解すると云ふ佐久間左馬太は、已に天命を知り初めたものだ。本來な

れば、大將の停年が去る四十三年度に満ちたのだ。其れが特命で延期されたのだから、恚ういふ事、の消息は、ちやんと心得てゐる。其處で老後の思ひ出に、修繕の出来た官邸なり、新築の官邸なりへ、先づ畏き邊へ奏請の上、皇太子殿下を招待し奉つて、全島の御巡視を乞ひ、其上深く骸骨を乞ふといふが、年來の希望であるそうなる。果して然らば、現内閣の運命如何に拘はらず、依然臺灣總督の儘、此希望丈は遂げさせやりたいものだ、ある人は言つて居た。何んにしても、圭角のない、企てのない、希望の小さい、分に安んずる、太平無事に出來上つた寛大な人だ。臺北へ行くと、一年に二度か、三度總督の猪狩なるものを見る事がある。勿論、臺北市を去つて、五里や三里は山へくと踏み込んで行くが、其行列や、狩の仕掛が、如何にも大名的で、馬鹿げて居る。殊に依ると、總督の猪狩は、總督を看板にして、之に附屬する高等官連が、一日、二日の保養す

馬鹿殿様
の
越

る爲の催しかもしれん。故に猪狩だといつた處で、本統に猪の飛び出し、そのな處へは連れて行かんで、前日來先づ豫め相應の獲物を狩らせ置いて、いざ總督が銃を執つて、現場へ臨んだとなる時に、其れを放つたから、いはい總督を馬鹿殿様扱ひにする催しなのである。萬事鷹揚で通つて居る總督の其を知らう筈のないのは無論だが、毎年々々、此不埒な事を催す不良官吏が、臺灣總督府に巢を構へて居る。此等の點から見ても、佐久間左馬太が、如何に、寛量な大人であるか、分る。臺灣島の官民は、誠によい陸軍大將を、其總督に戴いたものだ。

『十三』 内田民政長官閣下

臺灣民政長官内田嘉吉は、長い間の管船局長だ。其上後藤新平の乾分である。其れも管船局長時代には、際だつて見えななだか、臺灣へ民政

小心翼々
たる事

解明せる事

九八

有象無象
の相手

長官になつて以來、劇然たる後藤式色彩を表はした。一體此人は、小心翼々たる事務家で、死んだ兒玉大將や、當時の民政長官後藤新平やか、さんざ引ッ掻き廻したり、捏ねかへしたり、間接、直接に、まださまざまの附いてる處へ来て、民政長官たる人物でない。恐らく後藤新平が安心して遣せる人が他にないので、餘儀なく遣した人の如く受取れる。随つて、濁つた中へ投じて、濁つた風を見せたり、澄んだ風を見せたり、する柄の人物もなければ、植民地を一金穴として放れない、有象無象相手に亂麻中に快刀を断つ底の人物でもない。今日の如き臺灣植民地に民政長官たらしむるには、惜しい人格の人だ。其う思つて見る故か、ことなく出世間的の處學者風の處がある、夫人と共に、江戸ッ兒である云ふのに、江戸ッ兒氣風も見せないで居るからして妙だ。随つて初めて赴任當時の臺灣總督府は、いやに四角張つた人が来たとなつて、今迄

官紀振肅
問題

歳暮の
物

夜は放歌亂舞の馬鹿遊びに暮してゐた其れすら、此人の就任と共に、ひたり止んだ。さア臺北花柳界の寂れは非常なもの、料亭や藝者や、仲居は此長官の身の上に何か災あれかしと密に呪つた程である。今迄の長官官邸や、總督官邸へ自由に出入しつゝあつた民間の有志者すら、次第に足を遠のけた。一方には、官紀振肅問題が起つて、總督府を中心として先づ官界に大陶沙が行はれるとの取沙汰で、首府に遠い地方廳の小官吏の如き迄が、皆戦々競々として安き心がない。然るに只内務局長が代つたり、通信局長が代つたり、殖産局長が代つたりしたきり、別に何等豫期した程の大陶汰がない、其れが就任以來二年に近い今日でも未だない。其處で、一般官吏は、漸く安堵の胸を撫て下したものの、人から贈られた歳暮を突き戻すとか、人かわざく置いてくと云ふ年玉を受取らんと云ふのが評判で、一種親み難い、狂れ難い人の如く一般から

内田民政長官閣下

九九

解された。其處へ官民融和の會といつたやうな會が一つも開かれな
 くなつたので、民間の評判が極めてわるい。又一方には屬僚のする事
 迄ちやんと心得て居ながら、知らん態で、其報告を聴いては、一々其缺點
 を摘指するなどの事も敢てしたさうだ。其れのみでない、あの烈暑の
 最中各官衙は一齊に早退せよと云ふ時にも拘はらず、例の馬車を驅つて
 は、一局々毎に巡回するので、ある局の如きは事務が終へてもう退出
 時間になつたに、長官の巡視未済の爲、尙二時間も、三時間も長く暑い事
 務室に汗を流して居る事が屢々あつたともいふ事だ。故に同じ總督府
 部内でも、新民政長官の受けが甚たよろしくない。然るに、此不評判の
 聲が更に民間不評判の聲に相和して、大きくなつたから耐らない。遂
 には長官交代の説すら湧いた。
 吾人をして云はしむれば、内田長官の執政振りには申分がないのであ

内田嘉吉
 は其處で
 ある

其れは矢
 張りで

る。只今迄が今迄の處へ来て、急に内地風に内田式に改めやうとした
 丈の相違であつたのだ。處が、其れが著しく官民の感情を害す媒にな
 りさしもの長官も、薄々感つて之には一寸困つたといふ事だ。何に
 致せ、内田嘉吉は良吏である、能吏でない、後藤新平や、大島久、滿次は能吏
 又は準能吏の部分にはいる。純能吏や準能吏がやつて、十分纏りのつ
 いてない處へ良吏が来たのだから、統治が一寸困難だ。能吏が棘腕の
 巨斧を揮つた後に、尙若干の痕跡あるは當然だが、臺灣總督府に於ける
 能吏や、準能吏の痕跡には、却々甚しい點が澤山ある。其れが、殆んど臺
 灣の痼疾になつて居る。良吏内田嘉吉の手腕を揮ふべき時は、實に今
 なのである。だが、現今の内田嘉吉は能吏の行やり過した瑕の容易に
 回復しえないのを知つてか、急に就任當時のやうな政治主義を止めた
 らしい。茲に於てか、愁眉を開く者か出来る。渠れ矢張り話せるわい

内田は一個の傀儡

と云ふ者が出来る。流石の渠れでも、官民融和の必要を認めたと云ふ者も出来て来た。然るに説を爲す者は、之を後藤新平の入智政策であると評して居る。内田嘉吉、名こそ臺灣民政長官として、臺灣と内地を股に掛けつ活動しても、其實權は内地に居る後藤新平が握つて、其又残れる索の一端を、新渡戸稻造位の、後藤新平系の者が曳いて居て、操つて居るのだとも云ふ人がある。果して、之が事實なれば、臺灣民政長官内田嘉吉は一個の傀儡にしか過ぎん事になる。吾人は此説の偽りある事を信せんと祈る一人である。

一體内田嘉吉と云ふ人に、民政長官は不適任である。朝に夕に火事場泥棒のやうな政治家だの拘摸に等しいやうな實業家だのか、其處を狙つて、濶二無二突貫する處へ渠のやうな、内地式の良吏を差向けて置くのは可愛いそうである。殊に内田は膽の人でなくて氣の人である。才の

權變の懸引の内田の出来

人でなくて、心の人である。島内の生産業に盡したり、實業に力を加へたりする事は出来やうが、突發した當面の問題を即決し、其れへ是りをつけたり、ものない處へ、ものを拵へたりする權變の懸引は出来なからう。いや、出来た處で、到底後藤新平や、大島久滿次のやうな譯にゆかん。

加之、内田には、此二者のやうな、乾分養成法が出来ぬらしい。若し今の分あるなら、渠れは將來大を爲す事か甚たむつかしいのであるまいが。其れにしても、今のやうに亂脈になつた後を受け、天下非難の聲を一身に集める彼れは氣の毒なものである。佐久間左馬太といへ、渠れといへ、實は皆んな、他人がうまい汁を吸つた後の、後始末をする役廻りになつてゐるのだ。世話に、皿を嘗めた猫か叩かれるといふ事がある。佐久間や、内田の實際は、皿も嘗めない猫のやうなものである。

「十四」 逐はれたる大島久満次

臺灣を逐はれた大島久満次も、遂に原敬に拾はれて神奈川縣知事になつた。知事になると共に、臺灣時代の大島久満次を論じ出す人が少し現れた。臺灣に於ける大島久満次は、慥に失敗の歴史を残して來たやうだ。臺灣の民政長官としては、後藤新平に續いて、問題の人になつたが、問題の人になつたり、奸商と結托して、素敵な金儲けをした如く云つてゐる者もあるが、其實は少し買ひ被られた人物である。唯、臺灣全島で、飛ぶ鳥を落しそうな勢の後藤系に楯を突いたのだ、林本源事件などで一寸名を知られ、殊に林本源事件では、可なりにもうまい事をした者の如く沙汰された。其れが、臺北の苗圃で、臺灣中の、ありとあらゆる官民有志が催して呉れて、一寸一萬圓も費したと云ふ送別會を名残りに臺灣を

失敗の歴史

林本源事件

去る時、歸る旅費が足らんとあつて、密に臺灣銀行を煩した處などを見ると、此男存外に躰の下が黒くない。其うかと思ふと、警察出身の人物、丈に、他人の行動を直ぐ變な眼で監督したなどの矛盾行爲もある。其れが、先づ、どうして、民政長官になつたと云ふと、恰も、其時は、臺灣總督顧問と云ふ名義で、統治上の大小事に容喙した後藤の露西亞行き中、民政長官としては惜まれた祝辰巳が、俄然として世を去つた。其處で臺灣總督府は、恚ういふ際だから、他から人を入れるよりも、警務總長で、故參順からいつても故參である處の、大島久満次がよからうと云ふ説があつて、之には、佐久間總督も同意した。其處で、定ると共に、佐久間總督から大島久満次を長官にするがどうだと云ふ電報を、後藤新平宛に出した。之を聞いた後藤は、今更の如く驚いたが、定つて見れば、さてどうする事も出來ぬから、其時は、先づ其れ相應の挨拶をして置いたが、さて考へて

後藤新平の實情

逐はれたる大島久満次

見ると、大島が民政長官になつた事が、どうしても腑に落ちん。若し其當時後藤が内地に居たなら、當時の殖産局長にして、糖務局長を兼ねた今拓植局第一部長の宮尾舜治を長官代理位に任命し、其れから更に長官に任命するのであつたらしい。其れが、只旅行したばかりに、目算がらりと外れてしまつたのだ。サア、恚うなると、元の部下であつたに拘はらず、無暗に、大島を嫌ひ出して留めどがない。洋行から歸つても尙別の人に代へるとか、何とかいつてるのを、杉山茂九や、阿久澤直哉が僅にとりなして、彼れの民政長官は續けられたのだ。すると、一方には、だん／＼大島系のなるものが出來た。總督府總務部長の山田新一郎や、内務局長の川村竹治やの、純然たる大島派が次第／＼に頭を擡げ出す。けれど、一方總督府の御用紙たる臺灣日々新報に至ては、此主宰者たる守屋善兵衛が、純然たる後藤系であるからどうかすると、當然命を奉ず

べき處の大島長官の命を唯々として奉承しない、處へ、民間第一流の有志で大島系を代表する、而かも同新聞とは淺からの關係ある木下新三郎迄が、守屋と犬猿管ならざる仲になつた。此時に於て、誰か最も能く後藤系を代表するかといへば、其れは今の拓殖局第一部長たる當時の殖産局長宮尾舜治及、土木部次長長尾半平であつた。當時の、宮尾及、長尾は、後藤系の兩尾と稱された位、後藤新平の兩腕で、身は、民政長官たる大島久滿次の監督下にあつても、隱然として侮る可るべからざる勢力を有して居た。隨て、之に加擔する屬僚輩に至つても、宮尾、長尾系に附くを以て名譽とした、公々然「僕は宮尾系である、拙者は長尾系である」といつた者もあつた。今の臺灣日々新報社長今井周三郎の如きは、此以前からの長尾系で、現在臺日社長の椅子を贏ち得たのも、長尾等の力に依る處が多い。

現在本人の居る大島系と後藤系とは、斯様に迄在官在野の兩方面に分つて、久しい間軋轢した。中にも長尾半平の如きは、大島久滿次の引退期を早むるに與つて力なる運動を、東京へ來ては内々したさうだ。兎にも、角にも、其當時に於ける、宮尾、長尾の勢力なるものは、どうかすると、民政長官を凌いで居た處へ、林本源事件などが、突如として湧き起り、其れに大島が關係したとか、勸めて砂糖會社を建てさせて金を遣はす仕掛をなしたとか云ふので、同じ林家中の大島に反對せる側の者が、急に東上して大島の失態を後藤に陳情するなんと云ふ不意劇が天から降つて、茲に兩派の軋轢は、喧嘩兩成敗なる口實の下に、各々淘汰される事になり、去る四十三年の秋八月臺灣民政長官大島久滿次は、表面は病氣の故を以て職を辭した。一説には罷められたとなつて居る。

同時に、之に代つて來たのが、現民政長官内田嘉吉である。内田が就任

天から降つた不意劇

喧嘩兩成敗の結論

する間もなく、一方には督府御用紙の經營者にして臺灣日々新報社を長たる守屋善兵衛が辭任する、同副社長村田誠治が辭任する、宮尾は拓殖局へ、長尾は鐵道院へ轉任、大島派の山田と川村とは、同時休職を命ぜられ、此何れの派とも、一寸見分けのつかなんだ小林(博士、丑三郎)財務局長も休職、續いて阿里山作業所々長の峽謙齋、通信局長の持地六三郎等皆職を退くといふ如く、知名の所謂大官の進退に、續々異動があつたので、久しい間に於ける、大島、後藤兩系統の軋轢が漸くに治つた。何故大島久滿次が、一朝にして職を罷めた、何故後藤新平に反抗したかと云ふに、大島が政友會に款を通じ、是迄後藤のやつた失敗の歴史や、内地の政治家などに、極めて祕密にする事迄も密告し、其うして、議會に多數黨を頼む政友會を將來の力にしたいと考へたらしいのだ。其れが遂に見苦しい、總督府内部の軋轢となり、外聞のわるい醜態を島民迄に示し

大島政友會に款を

たのだ。政友會の原敬が、今度内相になると共に、當時の忠義者であつた川村竹治を和歌山知事に抜き、他に人もあらうに、大島久滿次を神奈川縣知事に抜いたと云ふのも、皆いはれのない事でない。殊に逐はれた大島久滿次を世に出したなどは、後藤新平に對する、原敬の桃戰狀と見て差支へがない。大島久滿次如何に竦腕の能吏でも、後藤新平と太刀討は六つかしい、矢張り原でなければ駄目だ。大島は、原と、後藤と喧嘩する爲めに、中へ置かれたやうなものだ。

「十五」 歴代の總督中誰れが一番豪い

樺山大將は、臺灣に於ける最も初期の總督である。此任命が、明治二十八年五月十日、其れが、同二十九年六月二日に樞密院顧問官に轉じたから、一寸一年間ばかりの總督だ。只の一年間ではあるが、臺灣創業の爲

臺灣の
骨の
折つた
山折
總督
榊

却々骨を折つた總督だ。當時の臺灣をいはふもんなら、未だ兵塵の巷で、蜚語紛々、人心搖々、朝に、夕に、羽檄旁午、于戈絡繹、身は行政官であつても、勢ひ其本分以外の事に多くの力を割かねばならん時で、臺灣の中南部に至つては、未だ敵の群據する時に、臺灣總督府の始政式を擧げたのが此人だ。無論初めの間は民政を布く事が出来ん、此始政式を擧げた六月も過ぎ、七月も過ぎ、八月も、九月も過ぎて、十月の下旬頃になつて、全島中の過半に、僅に民政を布き得たのだ。翌けて二十九年の四月になつて、漸く全島に民政を布いたものゝ、尙文官にして、帶劔を枕頭から放す事の出来ぬか、其頃の狀況であつた。又此時代の臺灣總督府には、現在に於て皆高名なる人物が居つた。先づ海軍大將樺山臺灣總督の下には、民政長官の水野遵が居る。續いて其幕僚に陸軍大佐の大島久直、其又下には、福島安正、森林太郎、海軍幕僚の側では、角田海軍大佐、楠瀬少

歴代の總督中誰れが一番豪い

佐。文官の方では牧朴真の内務部長、此配下に今赤十字社に居る後藤松吉郎、竹下康之、千々巖英一。外事課長には杉村濟、殖産部長には橋口文藏、其下に現農商務次官の押川則吉、横山壯次郎、學務部長には伊澤修二、衛生課には、過去の代議士で、郷里の議會でひよつとこゝ面議員の綽名を取つた濱野昇、參事官には、南州翁の遺子西郷菊次郎、中村純九郎、樺山資英、大島富士太郎、此他地方官としては、田中綱常、古莊嘉門、高梨哲四郎、櫻井勉、横堀三四、木下周一、相良長綱、伊集院兼良、河野圭一郎、松村雄之進、檜山鐵三郎、長田秋濤、柴原龜次、其うかと思ふと、滿州から廻された支那通譯の一團に、中西正樹、宗形小太郎、井深彦三郎、澤村繁太郎など云ふ、所謂東洋的豪傑連が居つたので、當年の臺灣總督府は、實に多士濟々の觀かあつた。然るに、斯る物騒千萬な、尙連日砲聲を絶たぬ督府門側の一室に在つて、人の讀めない奇書を拈ひくつては、頻りに妙文を草する軍醫

多士濟々の
たる初期々
總督府

かあつた。其れか當年の森林太郎、今の森鷗外であつたのだ。一方、當時の渡臺者はと見るに、皆漫りに土民を壓迫して、私利を壟斷しやうとする輩でなくば、官吏と結托して、總督府を食ひ物にしやうとする不正商人であつた。土民中の不都合な者に在ては、騷擾に乗じて、孤弱を虐いげ、其處の部落、彼處の一地には、敵か尙時々出沒すると云ふので、下情上達の意味から、臺灣從來の舊慣を利用し、督府の府門側へ餉こま筋と云つて、舊幕府時代の目安函の如きものを備へ、其れへ、さまざまの投書のあるを集めては、土民統治の緒として、當時の民政は行はれたのである。隨て、民政部員とした處で、軍政時代の事だから、朝から晩迄机にのみ倚て、事務を見ると云ふ事は出来ぬ。參事官や、課長か隊長になつて、部下を指揮するやうな事か度々あつたさうだ。樺山第一期臺灣總督の仕事は、實に此の如き時代に行はれたので、いはゞ民政を布いたと云ふより、

民政に移
組る迄の骨

解剖せる臺灣

一四

軍政を布いたので、今日の民政に移る迄の骨組みを略ぼ拵へ上げたのだ。随て臺灣に於ける樺山大將の功蹟を若しいふなら、民政の骨組みを軍政の骨組みで拵へた點であらう。此樺山の去つてから來たのが今の桂侯爵で、任期としても、此人は六月初めから、十月初迄だから、半年も臺灣に居ない、旁々桂太郎の企てたとか仕掛けたとか云ふ治績は、今の臺灣に殆んど残つてゐない。要するに、桂は臺灣の彗星的總督であつた。來る事も不意だか去る事も急だつた。此桂の後を受けて來たのか、質素と謹直な人格で世に知られた乃木大將である。就任か二十九年十月の十四日、依願免官か三十一年二月二十六日だから、此人は一寸一年餘り臺灣に居つた。まかし、乃木大將の如き、清廉潔白なる人格の人は、決して臺灣植民地の人でない。植民地へ來て、植民地の官民と伍して、植民地統治の實を擧ぐる人として政府か此人を臺灣へ寄送

彗星的總
督桂太郎

小説寄生
大木乃木

したのは、屹度何等かの間違ひであつたと思ふ。又乃木大將のやうな人格の人が、日本の植民地總督になるのは、未だ五十年も、百年もの間があると思ふ。其んな次第で、在臺中の乃木大將は、世人の期待した程の植民的統治の實を擧げて見せなんだ。又擧げる事が出來なんだかも知れん。若し、乃木大將の残した事蹟かありとすれば、其れは、小説『寄生木』に現れた臺灣に於ける大木大將と、植民地の犠牲に、自ら進んでなつた大將母堂壽子の事蹟位なものであらう。乃木大將は植民地の總督でなくて、寧ろ臺灣精神界の人だ。大將か臺灣に残したものか、亦精神界の産物より外に何も無い。臺北の市を端れて、西へ相思樹並木の勅使街道を三四丁行くと、又北へ二三町行つて、其處に三枋橋なる、臺灣新植民地の共同墓地がある。佛桑花の赤い花、からくと空に鳴る栴檀の實、風かなくて、旭か曇つた、

歴代の總督中誰れが一番面白い

一一五

乃木大夫
夫人墓

哀雲低迷の夕などは、何かなし、人をあはれッぼくして泣かしめる。況してや、うらぶれの遊子、千里の波濤を越えて來つて、此處に光明の天地を拓かんとしても、一度三枋橋の風に吹かれては、逝く者の過き來し方かたにはほろりとする。其追憶おぼえ多き林立の小さき墓石中に、『乃木太夫人長谷川氏諱壽子之墓』の十四文字の石碑丈は、就中丈か一番に高い。宏壯の意味ではない。質素な構への中に、著しく人の眼を惹く點からである。云ふ迄もない、此墓石の主か、時の臺灣總督、乃木希典母堂で、臺灣を死所しにころと定めて、人の嫌がる、殊に新植民地の女性の嫌がる處へ、先づ自ら身を土にして、尙多くの人の足を臺灣に据ゑさせやうとした乃木母堂の精神は立派なものでないか。乃木大將も豪いか、乃木母堂も豪い。蘆花の小説『寄生木』には、此母堂の事か、少し書いてあるやうだ。先づ、臺灣總督としての乃木大將か、何を臺灣へ残したかを見るなら、見る

兒玉は人
物本位の
政治家

ものは大將に聯關する此等の美しい、精神的方面のものより外にない。次に、代つて、總督になつたのが死んだ兒玉源太郎である。兒玉源太郎は同じ軍人でも、乃木の如き精神的の人でなくて、政治家肌の、豪傑肌の人物であつた。若し適任、不適任をいふなら、今迄の總督中で、一番適任の人かも知れん。第一此總督が、部下の民政長官に、後藤新平を抜いて用ゐたのが此人の第一に豪い處である。つまりいへば、臺灣の今日は、兒玉が、後藤をうまく用ゐたから出來たともいへるのだ。早くいへば、兒玉あつての後藤である。後藤あつての兒玉である。兒玉も人物本位の政治家なら、後藤も人物本位の政治家だ。此點に於て、二人者は、肝膽相照したのかも知れん。思ひきつた植民政策の行はれたのも決して偶然でない。隨て、當時の臺灣へは、内地で志を得られない人間が、毎便々々の船で押渡る。其うしちや、内地からの添書を懐にして兒玉の

兒玉の南清策

官邸を叩いたそうである。其れを又五月蠅いとも思はんで、皆其れ相應の職を與へて居たのである。代々の總督が唯島内統治にばかり腐心するのに反し、兒玉源太郎は、密に南清策を劃して居た。之が爲には阿久澤直哉の現に經營しつゝある三五公司を對岸の南清に開始させ、一方には、養ひ置く處の志士を續々對岸へ送つて居た對岸へ送つたばかりでない。其一部分の者の如きは、之を本願寺の布教に名を藉りた布教所へ入れて、進んで事を清國に構へ、之を動機に南清策の目的を遂げんとすらしめた。否已に遂げ得る迄に策が進行し、兒玉の要求や、兒玉に一步も、二歩も後れた外務當局者やの請求に依て、幾隻かの帝國軍艦が忽然として厦門近海に停泊した。續いて大口徑の軍艦砲が、鼓浪嶼の巖壁上に据ゑられ、號令一下將に火蓋を切る迄の危機に迫り、漠々たる戰雲が、頻りに南清の天を斷れ飛んだ。山雨將に至らんとして、風樓に

南清策の大蹉跌

滿つといふのが此時の光景だ。一葦帶水の臺北に居て、此時手を拍つて喜んだのは、唯兒玉源太郎一人だ。然るに、詎ぞ知らん、此兒玉が百年の大策は、當局者に十分決心のない爲め、九仞の功を一篋に缺き去き去つた。巖壁上の砲も、艦が撤回された、幾隻かの帝國軍艦の影は、日ならずして厦門の海島から没し去つた。之を聞いた兒玉は、双眼から、大きな涙を落して、男泣きに泣いたといふ事だ。同時に兒玉の南清策なるものは、大蹉跌を來し、一敗又起つ能はざる悲境に陥つた。ある意味を以て經營させた三五公司の如きすら、十分の効果が擧がらんといふ當時の状況で、之が爲兒玉の煩悶した事は一通りでない。先づ兒玉源太郎といふ人の遣り方は、一寸斯ういつたやうなものだ。此人又至つて平民主義の人で、浴衣かけの儘、獨りぶらりと市へ出ては、妙な處へ迄平氣で出入し、歸つた後で總督閣下である事の知れたなどは、一再でな

い。故に臺灣中に、見玉に於ける此種の逸話や、珍談が非常にある。其うかと思ふと、此人自身が軍入出身でありながら、ともすれば、文官の上に威を振はんとしたがる當時の軍入の頭を適度に抑へては、文官側の萬事やりよい事に力を傾けた結果、文官の勢力が、次第に武官を凌ぐ如き有様になつた。一寸宴會があるにしても、文官の席は、武官の席よりも往々上座に定められたさうだ。其れかあらぬか、此傾向は今日の臺灣總督府にも見える。ある者は、之を文武の片輪統治だと評して居るもう一つ、此總督に就いて云ふ事は、政治家や、文士や、新聞記者や、苟も己れに不利益なものを、自家藥籠中の者にせずんば、安心の出来んと云ふ風であつた。之から推して考へて見ると、竹越某に金を與へて、臺灣統治志とか、何とかいふ、文字にしたる臺灣統治の實を世に發表した事や、御用紙の記者を去らしめても、去るに臨み必ず相當の待遇法を講せし

めた事やは、滿更形のない事とのみは思はれぬ。之に依つて見ると、兒玉源太郎は、清濁併せ呑む底の人物であつたやうだ。臺灣總督は、今の總督迄に、恰度五度代つてゐるが、兒玉源太郎の如き、上にも通じ、下にも通じ、大小兼ね合せて、霞ヶ關の連中に迄泡を吹かせんとした者は、前にも空しければ、後にも空しい事であらう。半面に多少の缺點はあつたが、先づ、理想の臺灣總督であつた。然るに、此人今や亡し、吁といひ度なる。

「十六」濁つて吹く臺灣の吏風

臺灣の文官の位置は、兒玉源太郎が總督で、後藤新平が、民政長官であつた以來、非常に高められた。著者が初めて臺灣へ行く時、船を神戸から乗ると、下の關へ船が着いた。「すると此處から内務局長閣下が御乘

りになる』と云ふ前觸れた。さて内務大臣なら閣下も聞いてるか局長で閣下は變だ殊によると内務大臣の誤りでないか知らん其れにしても内相が突然の臺灣旅行も少し變だと思つてるとどうしても其れか内務局長閣下である。内務局長閣下も内務局長閣下臺灣總督府の内務局閣下である。著者が續いて『何故閣下と云ふんですか』と聞くを臺灣航路の御用船船長丈に小聲で制しながら『臺灣で内務局長は内地の内務大臣です。貴君も臺灣へ行つて見なされれば分るが局長は皆閣下と云ふ敬稱をつけるのです』と教へて呉れた。如何にも臺灣へ来て見ると總督長官以下局長迄が閣下で同じ高等官でも廳長になると貴下である。貴下は漸く演説か祝文か祭文でも讀む時よりはんが閣下になると常用語になつて居る。臺灣の屬吏や商人や一般住民や新聞記者や雜誌記者や活版職工になると此閣下なる文字を毎

臺灣では何故閣下を云ふ耶

臺灣の三ッ釦

日無數に取扱ふ處の光榮を有するのだ。始めて船で内務局長閣下を聞いた時は馬鹿にして居たが愈々臺灣へ乗り込んで見るとさて自分も閣下なる尊稱を其人に奉らねばならん事になつた。しかし吾輩は遂に臺灣の官吏なる者に此閣下なる尊稱を面と向つていつたのは佐久間左馬太一人よりなかつた。吾輩が軍隊出身である點から見ても是れは致方のない事であらう。何れにしても臺灣の閣下はすばらしい勢力のものだ。一度閣下に睨まれた以上は島内に居て手も足も出なくなるのが普通である。島内では此閣下及閣下相當の者を三ッ釦といつて居る。廳長貴下になると二ッ釦といはれて居る。是れは官等の上から制服につける袖の章の相違からいつたもので判任官又は同相當では釦が一ッよりない。しかし巡査と鐵道院官吏を折衷したやうな制服を着て釦をぶら提げた姿は臺灣でなくは見られない服装だ。

帶劍の教
員と醫師
と雜記師
者

之が中學校教員にも、小學校教員にも、公學校教員にも、國語學校教員にも、女學校教員にも、應用する。土人教育を主とする公學校や、國語學校の如きにこそ帶劍も必要だろうか、内地人の兒女を集めた學校に迄、先生が劍をふらさげるとは妙な制度である。臺北醫院なる臺灣第一の官立病院へ行つても、劍を提げた醫者が嚴しい態度で患者に臨んで居る。此點からいふと、陸軍衛戍病院が、野戰病院が、兵站病院を見るやうだ。其んなら、劍で威嚴を示すやうな、土人患者が多いかと思ふに、多くは八九分の内地人患者だから尙愕く。更にもつと驚くのは、總督府内に、官營の雜誌が澤山あつて、其記者が、亦文官同様の制服制帽、帶劍だから呆れ返る。半官營位の雜誌は、内地にあるが、雜誌記者の帶劍は臺灣でなければ見られない。其れも軍政時代とか、秩序の回復しない時なればいざ知らず、領臺以來十八年にもなる今日、尙軍政時代の服裝を官

洋行を條
件として
の就任

吏にさせるのは間違ひだ。灣吏の頭に、動もすると、軍政時代なる觀念の湧くのは致方がない。兒玉式、後藤式の色彩は、尙此處らにも存して居る。其れから下級吏に丈、其恩典がなくて、上級吏になれば、少し少し上官に胡麻をスリ込めば、洋行が出来る。洋行は臺灣官吏に取つて、唯一の福音だ。同じ學士の稱號はあつても、博士の學位はあつても、内地に居て容易に洋行の出来んもので、只洋行したさの一念から、來任時に之れを一條件にして來る者が多い。甚しいものになると、來任前に洋行をさせて貰うて、其れから就任するなどの變則的恩惠に預る向きもある。隨て、洋行前後に於て、臺灣の爲めに盡す時間なるものが、洋行期間を差引くと、極めて少いものになってしまう。事情を知つてか、知らんでか、其れをしも、平氣で續け居る臺灣總督府を見ると、豫算剩餘金の澤山溢れて居る事が知れる。又其れ迄にしなければ、臺灣に良吏や、能吏

法性寺の
入道より
長入の
人任の

を得なれない理由は、あるまいと思はれる。洋行目的に臺灣へ来る官吏に碌な奴のない事は分つてゐる筈だに、其れを黙過する臺灣總督府は、情實の府ぢやないかの非難は致方のない事だらう。そうかと思ふと、殖産局なり、通信局なりの一官吏に、尙幾つもの事を兼任させる風がある。臺灣博物館の技師川上瀧彌の兼職に至つては、彼是れ十以上は儘にある。先頃洋行に就いた、臺北醫院の稻垣博士の兼職に至つては、法性寺の入道の三四倍の肩書がある。甚しいのは、新聞記者を、官衙の囑托といふ名義で、公々然、其名と、手當額とを臺灣總督府職員録へ載せて置く。而して、此の半面を見て、怪訝に耐えないのは、職員録に囑托といふ名義の多い點だ。先づ一寸いつても、殖産農務課の囑托に、佐々木忠次郎博士、早田文藏博士を初め、此課には凡そ九人程の囑托が居る。同商工課にも博士はないが、九人程の囑托が居る。

囑托政治
の弊

鐵道部の方を見ても、今の電氣局長の松木幹一郎も居れば、元の總督府鐵道部長で、鐵道院の東部か西部の管理局長たる長谷川謹介が居る。此他專賣局の永井一雄博士、阿里山作業所の河合鈿太郎博士、蕃務本署調査課の鳥居龍藏といふ如く、此他何の局何の課何の部を覗いて見ても、内地に居る囑托といふ人の顔觸れが大變な數だ。新渡戸博士の如きも亦其一人である。極めて、甚しいものになると、仕事を薩張しないで、内地に居て、其手當を貰つて居る。數からいつても二百人近くの囑托があるから、臺灣總督府は、一種の囑托政治に依つて、動いて居る如くにも受取れる。之れを、彼是れいはれるを、今の内田長官が非常に苦に病んで、新に置く囑托を絶對にしない事にしたそうだが、さりとは、總督府の情實の歴史を知らんものである。内田長官は、罷めたくも、罷める事の出来ない情實が、人と、督府との間に潜んで居る事を知らないのだ。

もう一步皮肉に突き込むと、督府には職員録にも何んにも載らない。一種の囑托が澤山ある。此種の者になると、囑托といふよりは、餘儀なく囑托の名義を與へて、ある意味の保護を與へて、ある意味の保護を與へるといふよりは、餘儀なく囑托の名義を與へて、ある意味の保護を與へて、ある意味の保護を與へ言だらう。若し人間の名を指摘せよといへば、進んで指摘することも吾人は否まない。即ち現在の臺灣總督府の官吏は、斯る空氣中に囚はれてゐるのだから耐らない。之れが次第に比類のない臺灣の吏風をなしたのだ。混濁的政治、不透明體政治、之れを通して吹く風に、更に漚されたのが臺灣の吏風である。臺灣の吏風を約めていふと、金を溜めたいになる、金を儲けたいになる、又臺灣くんたり迄來る者に、此考へのない者は一人もない。此目的の爲に手段を選ばないのが、臺灣の吏風である。茲に於てか森孝造のやうな者が出る、横澤次郎のやうな者

線々野に
下る官吏に
の古手

が出る。谷信敬のやうなものも出れば、里見義正、松井四郎のやうなものも出る。此他、砂糖會社や、さまざまの營利事業界に身を投ずる底の、脱官吏的の野心家が續々出ては、在官中結托してゐた在野の者に結托する、そうして督府の内幕を知るを表面にして、民間を掻き廻はす、乃至は利權收獲の爲には、總督府を脅かす。此一種の惡風に化せられたのが、今の臺灣官吏である。臺灣官吏が慙一點張り、毫末も官吏らしい點のない事は、驚くばかりである。臺北醫院の某博士の許へ、曾て新渡臺の醫師が來て、『實は熱帶地病の特殊研究に來たのだから、俸給の如何に拘はらず、相應の處へ廻して貰ひたい』といったもんだ。すると、皮肉な博士が『そりやい、考へです、大抵の人は金溜め一點張り、特殊の研究など云ふ事は、てんで頭がないんですからね……』……しかし念の爲に問ねますが、本統に貴君は、金溜めの爲でない

ですか』と突ツ込んだ。之には、新來の醫者君美事に思はくが外れたが、初め言つた言葉の手前もあり、『貴君は本統に金溜めの爲でないですか』といふ博士が最後の意味ある言葉を聴き流し、『本統にそうです是非共特別の處へ御廻しが願いたいのです』をいふ中にも、心中では『是非共特別の處丈』を博士が、不言不語中に察して呉れ、ばい、など思つたか、言葉一度口を出ては、放つた矢も同然だから間に合はない、二日と経たない中に、マラリヤの流行する、東部のある未開な地の公醫が、何んぞに遣られてしまつた。行つて見ると、見ると、聞いたとでは大變な相違、此先生つくづく、此勤務がいやになり、一年経つか、経たない中に博士の許へ手紙を遣り。此方にももう一年から居ります故、なるべく御繰合せの上、臺北方面へ、御廻しが願いたい』といふと、此に反對する博士の返事が又振つてゐる。『如何にも御手紙の件は承知した。承知

はしたが、熱帶地に於ける特殊病の研究がもう出来たんですか、一年や其處らに出来たのでは本統に研究したのではないでせう、しかし私が考へるに、貴君の目的は、熱帶地病の特殊研究よりか、別に目的があるのでせう。其んなら其うと、早くだに捌けていつて呉れ、ば、其土地へも遣らんのでしたものを、初めて内地から来る人に、往々此癖があつて困るです』で、漸く、此醫師先生臺北の生活に移り得たそうだが、此一事を見ても、臺灣官吏氣質の一斑が窺はれるのである。

『十七』 臺灣の自稱夫人氣質

臺灣には妙な人間が澤山居る。官吏にも變則な階段を踏む者が多い。内地で書生であつた者が、臺灣の土を踏んで直ぐ高等官になつた者なごもある。官吏任用令の特別な處が、臺灣の臺灣たる處かも知らんが、

突飛なものになると、資格も何にもない、一種の浮浪人が堂々たる官吏になつて、巾を利かすなどもありそうだ。随て之に連れ添ふ自稱夫人なる者に、又素ばらしい人物ではない、したゝかな人間がある。内地を喰ひつめて、樺太へ渡つて、朝鮮へ渡つて、滿洲へ渡つて、南清を経て、其うして、常夏の國の臺灣へ神輿を据ゑ奉つたなぞは、判任官々舍邊にざらにある。どうかすると、其れが高等官の夫人連や、同待遇官の夫人連や市内の所謂紳士連の夫人中にも可なりになり、之に随伴する珍談逸話の種が、常住絶える事のない位、其れも、之も、純民的の新聞紙のないお蔭で、暗から暗へ葬られてしまふ。此等の自稱夫人連中には、曾て前々課長の内縁の妻であるに、其課長が、職を辭して内地へ去つた後は、又さる囑託の妻君になりる。此囑託先生が又去つた後は、三度市内のさる紳士の夫人になり濟し、其うして、臆面もなく、東京ッ兒振つて、公會の席

所謂自稱
夫人の半
面

東京ッ兒
振る灣妻

へ出しやばる者などもある。所謂灣妻といふのが是れだ。其んなら此自稱夫人東京の生れかといふに、其うでない。東京といふ文字を新聞で見ると、外に知らず、東京といふ都會を繪葉書か、夢に見ると、外に知らず、三越がどうの、白木がどうの、に至ては、全く知らんである癖に、いやに東京ぶる。『京城は虚榮の塊』といふ記事が朝日新聞に見えて、近頃の朝鮮京城に於ける、官吏の夫人性質を説いたが、中に、いやに東京風を吹かせる虚榮な夫人があつて、『東京は何處にお住居でしたか』を皆迄いはせず、山の手の牛込はよかつたが、山の手の牛込木挽町で、立派なぶち壊しをやつた事があつた。此のやうな事實は、今の臺灣あたりでも見る事の出来る。三越へ行つた事もないのに、三越を語り、又其れを語り得ない者は、一種の耻辱である如く解するのは、所謂今の灣妻氣質である。臺灣では、官吏の灣妻を、何とも思つて居らんが、内地

なれば、其んな官吏は、人民の風上へも置けない代物だ。東京や内地の他の女學校出の淑徳の高い夫人や、若くは明治前後の堅實な教育を受けた、温和な、慕はしい夫人の臺灣にない譯ではないが、灣妻若くは灣妻的夫人跋扈の爲、其れ等の屏息しつゝあるのは嘆しい。甚しい官吏中には公然齷者^{そくしや}を妻にしたり、何處の馬の骨か分らない女郎上りを妻にして、其れを公然引ッ張り歩いてゐる向きもある。

臺灣に於ける大式日例へば天長節とか、始政紀念日とか云ふ時には、各民間の有志も、各官衙學校の高等官も、續々總督官邸の夜會へ招待される。其又招待状に必ず、何々殿、同令夫人と二人連名の宛名になる。随つて、夫婦連名の來賓が、其晩は廣い官邸中へ滿ち集る。然るに、此神聖であるべき、最も紀念すべき會である晴れの席へ、正しい妻でない、一種異體の分らない自稱夫人を連れて來る者が時々ある。其自稱夫人で

神聖な夜會へ灣妻同伴

灣妻の定義

あるのを知りつゝ、大目に見て招待状を連名にする係り官もある。其うして、酒池肉林の如き、此夜の會が極めて賑やであるのはいゝとして、婦人席、男子席と定つて居る其婦から、わざゝ男子席へ突貫して、頼みもせんのお酌をしたり、戀意な男子を築山の邊へ追ひ廻す底の若い夫人連も往々あるのである。之を、さまざまに怪まないのが流石は臺灣だ。内地などから行つて、初めて此光景を見る者は、其亂暴に唯々呆れ返らざるを得ない事になる。之を、又灣妻氣質の一つと見ればよろしいが。嚴格な意味で、灣妻の定義をいふと、臺灣で持つた妻で、臺灣で別れる妻の意味になり、女も、男も、内地には妻もあり、良人もある身の意味になる其れか、一旦縁あつて合意上の、一時的夫婦の縁を結ぶのだ。之が臺灣では下層社會に多い。第一女郎か年季明けたとて、内地へ歸るには、五十と百の旅費か要る。其れよりは儘よとばかり、當時の馴染

客で獨身者なる者の家へ轉げ込んで、第二の作戰計劃を籌すが普通になつて居る。處か、此獨身先生、一朝にして、二つ釘にでもなる時がある。此女郎上りの灣妻が、一躍して自稱夫人の群に入り得るのだ。今の臺灣婦人會の空氣に一種いやな匂ひのするのは、全く之れあるが爲だ。一體臺灣に居る内地の女は、どれでも、之れでも、怠け者が多い。亭主の脛を嚙つて、お化粧に浮身を裏して、往復十錢の車代を奮發んで市場通ひをするなどは先ついで、ほうで、高等官夫人、若くは、同相當官夫人などになると、殆んど家事を治めず、又治めるのを不名譽と心得る向きが尠くない。愛國婦人會臺灣支部や、赤十字篤志看護婦人會の如きものが、此種の自稱夫人に依て左右されて居るのである。若し、今日の臺灣婦人會から、内田嘉吉夫人や、宮本少將夫人や、野島少將夫人や、此他五六の大官夫人と、そうして民間の五六夫人を除いたなら、夫人らしい夫人

家事を治
るに不名
譽と心得
る自稱夫
人

がなくなるでないか。濁れる風を、又通して吹く東風の中に、其夫人ばかりにいゝのを求むるのは求むる者の酷かも知れんから、此點は餘りいはんで置くが、あの女學生とも、奥様とも、藝者とも、女郎とも、娘ともつかん、東京風とも、大阪風ともつかん、厭味のあるあの一種のスタイルを聯想すると、其れを黙つて奉つて置く、臺灣紳士の雅量の程か更にしるべれる。

「十八」長官の視察振り

長官が東部臺灣へ行くとか、南部臺灣へ行くとか云ふ前觸れは、五日も十日も前から知れる。又其巡視日割なるものが、ちやんと出来る。之に依て長官の進退が分るのだが、此又巡視行列といふのが、素敵に仰々しいものだ。何の事はない昔の大名行列を見るやうだ。廳から廳の

仰々しい
巡視行列

到る處へ
威を示し
歩りく

所在地へ長官が着くと、廳長以下の屬吏や、土地の住民が其れを出迎ひて、早速人力車なり、臺灣名物の轎なりに入れ奉る。斷つて置くか、之は長官一人きりでない。文書課の屬官も居れば、鐵道技師も居る、秘書官も居る、局長も居る、蕃語通譯も居る、御用代議士も居る、御用商人も居る、恩澤に浴する會社の重役も居る、御用記者も居る、護衛の警部も居る、警官も居る、寫眞師兼帶の屬吏も居る。其れ等迄が、長官並の待遇を享る當然位に濟して、其後に尾いて行く。其うして、土地の公學校を見たり、農作物を見たり、廳長の報告を聴いたり、土地の歡迎會に臨んだり、演説したり、御馳走になつたり、到る處へ威を示し歩く。幸に、人力車があつたり、轎のあつたりする處はいゝが、之の全くない處が、隨行員に迄足りない土地へ行くと、あらゆる官衙の椅子や、藤椅子へ、擔ひ捧をつけて、其れへ乗つて擔はせる。其うして、臺北と云ふ處も、臺南といふ處も、島内

長官のへ
なぶり通
中

の首府の大官も、見た事のない質朴な土地の人を喫驚さす。又行列が悠々たるもので、先頭の長官先づ、へなぶりをへなぶつて、之を背後の局長へ廻送すると、局長が之に返し、へなぶりを又へなぶる、其又背後の御用代議士がへなぶる、秘書官がへなぶる、技師がへなぶる、東道の主人公たる土地の廳長がへなりふり、其難有いへなぶりを、前になり、後になり、各行列の間を持ち運ぶ傳令使なる者があつて、轎上の人の極めて暢氣なるに反し、之は眼のくるめくやうな忙しさを極めるのだ。其れから、此纏つたものを、御用記者が貰つて、其日の行列記中へ鹽梅する、寫眞師は寫眞師で、此光景をレンズに收めて紙上に光彩を添へるといふ寸法になる。此又へなぶりを、現民政長官の内田嘉吉が、非常に得意とする。上之を好む、下之を好まざる理由はない。其處で、新元技師の如き、三村秘書官の如き、皆何れも長官に劣らない達人になつた。へなりぶ

りの達人不達人は別としても、兎に角内地官吏の知らざる、特種の視察を行ふのであつて、長官隨行の者亦同じく此快樂を頗ち得らるゝ譯である。之が爲、一方に於て、最も奔走して、最も勞多き者を求ると、其地方の警察官より甚しいものはない。けれども、渠れ等は、殆んど帝王の鹵簿を送迎する位に思つて、些の不平も鳴さず、神妙に其職を全うするのである。さらば、此多くの人の勢と、手數とに依て得た長官の視察に、これ程の益があるかといへば、其れは疑問であらう。何故疑問かといへば、凡そ前觸れの視察をして、其地の實際を見た事の例か、前に一度もないからだ。前觸れの視察は、要するに、整頓した處を見せるの意味である。整頓した處の視察でいゝなら、其地方廳の報告書と、寫真を取寄せて見る方が得策で、且つ簡便だ。恚うなつて來ると、視察を何の爲にするのか、分らなくなつてしまふ。ある者は、長官の視察を評して、觀光的地方

前觸れの實
價

新渡戸博
士と長官

視察であるといつた。觀光的視察なら、序に梅屋敷ありたの官僚藝者も、一緒に連れてけばよい。ホテルの樂隊を連れてき、も一つ序に、酒や肴を載せた兵站車を後から打たせれば、尙いゝでないか。觀光的視察の評は、代々の長官か、甘んで受くべき處の公平な批評であるまいか。殊に、長官の地方巡視といつた所で、長官自身に其れを見る明かないので、多くは隨行せる、各専門の技師や、屬吏が其衝に當るのだともいふ。果して然らば、長官の視察は、屬吏や、技師の單獨視察と選ぶ所がない。長官の視察に尙ぶ點か、長官の二つの眼であり、二つの耳であり、之を解釋して、判斷する一つの頭腦である事を思へば、長官の地方視察は、輕んすべからざるものである。前年、新渡戸博士が曾て臺北へ來て居る時である、今の内田民政長官は、東部臺灣の巡視に出掛けて行つた。其れを同列車に送りながら、臺北から直ぐ内地へ歸る博士は、人交せもせず、

一等室に長官とさし向の儘、東部臺灣視察上の要點を教へて居つたと云ふ事だ。其れ故博士實際の用向きの一つか、長官の東部臺灣視察に、何か資料を興へる爲であつたともいはれて居る。恙うなつて來ると彌々益々長官の視察振りなるものに、値打がなくなつて來るやうだ。其れとも臺灣に限り、此視察振りでないとなれば、吾れ亦何をか言はんやである。

「十九」鮮明を缺く愛國婦人會臺

灣支部

愛國婦人會は、愛國婦人會である。只愛國婦人會の目的を盡せばよいのである。處が愛國婦人會の臺灣支部に限つて、兎角其標榜の鮮明を缺く事が多い。いへ換へれば、愛國婦人會其ものゝ名義で、さまざま

一般官衙
も同然

雜誌の命
令的購讀

事業をしたり、さまざまの事に迄干涉する。内地の愛國婦人會を見た眼を臺灣に轉する時、何人か奇異の感に打たれないものがあらう。第一、愛國婦人會臺灣支部は、一般の官衙と異なる。同支部の位置を、便宜上、財務局内に置くはいゝとして、毎日此事務に當る事務員其他が、悉く財務局財務課員若くは、一定の官職を有する者で、而かも、其れが、其官職通りの事務を執らずに、愛國婦人會の事務専任だから驚いてしまふ。又同支部から發行する『臺灣愛國婦人會雜誌』の編輯記者に至ては、財務課員の名義で、財務課員の俸給で、財務課員の服装帶劔で、毫も通常の雜誌記者に異らないから呆れてしまふ。其上、此機關雜誌を、全島内の官民に普く購讀を強いるのだ。つまり會員に對して、命令的、雜誌の購讀を強いて居る。而かも、其れが、支部長たる民政長官夫人の名義、又は、各廳の廳長夫人、即ち支會長の名義で、するのだから、間違ひつこはない。

隨て内地の文士の原稿を大に買入れ、又命令的廣告を盛んに雜誌へ載せ、會員數が増せば、増すに隨て部數の増刷をする故に其體裁、及發行部數、經濟上の收益からいつても、内地民間に於ける、有力なる婦人雜誌を凌駕する程の勢ひだ。誰れの眼にも官營雜誌とは受取れない。官營雜誌、必しもわるいと云ふのではない、只官營の雜誌、愛國婦人會雜誌と云ふ、美しい名の下に、民營の純利益的専門婦人雜誌以上の事を敢てするものが感服せぬ。毎號同會に於ける廣告依頼者を見てすら、廣告依頼者對愛國婦人會の關係の肯かれる向きが大分ある。鐵道ホテルの後藤勝造が曾て若干金を同會へ寄附すると、今度は頼みもせんに、ホテルの廣告を無断でして、之れはと愕く、後藤の手から、數百圓の廣告料を徴收した噂もある。加之、愛國婦人會臺灣支部は、討蕃隊慰問の名の下に、蕃界に於ける蕃產物其他の取次販賣、若くは、入札請負をなさしめ、之を

愛國婦人會の
知人の
實際の
業務が
如何なる
事なるか

⑤

全部民業に移さば、當然尙大に發達すべき生産物の利益を壟斷し、生産物の産額増加を拒むやうな事をする。否、大になしつゝある。之が、女性である處の、支部長たる民政長官夫人以下の、總てする處であるかと思はれる。其うでなくて、皆總督府が植民政策の一部として、總て男性の吏員に於て取計らひしめるのである。故に、名こそ支部長である、幹事である、委員であるといつた處で、實際の愛國婦人會員であつて、愛國婦人會臺灣支部が、現になしつゝある處の營利事業を全く知らない者が過半数あらう。殊によると、もつと以上もあらう。討蕃慰問の名は如何にも美しい、其れを實行する爲の營利事業なら、官營でも忍ぶ事が出来るとしても、其手段に於て、さまざまの噂が世間にある。支部長である、内田民政長官夫人が、其れを知るか知らんかは、兎に角、慈善を標榜して、能く民間に起る處の山師的、事業に彷彿たる手段が、蕃產物取扱者、若く

は、此拂下げ者と、當該官吏間にあるに至ては、支部長の責任の那邊にあるかが疑問になる。

新報社を
左の愛國婦人
會を

説に據れば、株式會社臺灣日々新報社の株式の大部分が、其亦實愛國婦人會の左右する處とも傳へられて居る。説の信偽は兎に角、女性の慈善團體たる一愛國婦人會支部が、男性の組織で、臺灣總督府の御用紙の意味たる新聞紙を左右する權力の噂丈でも、をかしい事實ではあるまいか。財務課員とか、囑托とか、乃至はいろいろな名義で、一愛國婦人會雜誌を拵へるに、五人も、十人も係りきり、臺灣總督府の機關雜誌の如き觀ある其事業から推しても、新聞社對愛國婦人會支部の有株式云々の説は、何れとも斷言する事が出来るのだ。

一體愛國婦人會なるものは、近いた奥村五百子女史の主唱に係る民間の一慈善的團體の者で、日本赤十字の向ふを張つて現れたかの傾きあ

婦人の
雜誌の
記者

る。總裁に皇族の妃殿下を推戴し奉つたり、重なる幹部に、多くの貴婦人を加へたりする點から、自づと赤十字社同様政府の保護する事になつたとはいへ、俄に之を以て、一官衛的團體とは見られない。又見る事の出来ない性質である。然るに、臺灣總督府は、一官衛の意味を以て迎ひ、其經營施設に於て、殆んど他の植民政策同様の考へを有して居るらしい。茲に於てか、内地に於ける、愛國婦人會と、全く別種の觀を生じ、愛國婦人會雜誌を編輯する爲、又其販路擴張の爲め官吏にして、記者たり、記者にして官吏たり、官吏にして廣告取たり、廣告取にして官吏たるか如き、奇なる現象を生んだのだ。制服、制帽で、帶劍で、婦人雜誌を拵へると云ふのが、已に天下に類のない趣向である。臺灣總督府でなければ、出来ない事であらう。

『二十』樟腦專賣の真相

同じ臺灣總督府の專賣品でも、阿片原料になれば、印度產、波斯產が重く、此供給地に至つても、大抵香港に限られて居る。又煙草にした處で、臺灣の産額と云ふものは極めて少く、原料の多くを清國に仰いて居る中に、只島内からのみ産するものをいふと、樟腦と食鹽とより他にない。就中樟腦に至ては、臺灣特有産物の一つで、セルロイドの製造業勃興以來、其原料に供せられる點から、急に其需要額を増大し、從來藥用に供されたり、防蟲用に供されたりした以外に、何等の効力用途のなかつた樟腦の前途に、一道の光明が投げ與へられたのだ。而かも、輸出地が、悉く歐米地方である爲に、臺灣の製腦業は、世界でも有名なものになつて、殆んど東洋の製腦を代表する位になつた。しかしながら、既往に溯つて、

樟腦は臺灣の特産物

肥盛すべき内部の魂

今日專賣制度を布き、該産額の増大を圖るやうになる迄の魂膽に至ては、特に肥盛すべき程のものがある。咸豐の末年に當り、清國政府は、島内に樟腦の專賣事業を開始した。すると、同治八年になつて、英國政府から嚴重な抗議を受けたので、此の制度が廢され、同時に外國人に對する制腦權なるものが出來た。其れにも拘らず、劉銘傳の巡撫時代に、強いて此復活に着手すると、又々英國政府からの抗議を受け、數年ならぬに、課税制度を以てして以來、時に或は又官業になつた事もあれば、課税制度になつた事もあれば、兎に角、外國人に對する製腦權の事で、當時の清國當事者は、さんざ手を焼いて困つて居た。領臺と共に、此困難な事業をも引受けたのが、我臺灣總督府で、其處で總督府は、明治二十八年を以て、全島に樟腦製造取締規則なるものを發布し、舊政府の許可證を有する者の外は、其製造を禁止する事に

名を既得
し外に
既得
し外に
既得
し外に

解明せる臺灣

一五〇

した。此舊政府といふのか、即ち清國政府を指すので、曾て清國治臺當時から、尙我臺灣總督府時代に迫んで居る臺灣に在る外國領事か、如何に、我此施設に妨害を加へんとしたか。時に此内面にあつた處の。在留外人に在つては、清國政府の事理に暗きを奇貨とし、條約規定の範圍外で、妄りに不正の利を營んで習慣久しきに及んだばかりでない。時に名を既得權の侵害に藉りては、敢て其施設に迄容喙する妄狀があつた。之を、臺灣全島が我政府の有に歸してから後迄も改めない。其處で、舊政府の許可證云々の意久地のない取締規則が發布され、依然として在留外國人等の爲、全島の製腦事業は掻き廻されて居た。しかし、翌二十九年になると、斷乎として、現行條約を本島にも適用し、新なる樟腦規則を布いたから耐らない。さらですら事あれかしと待ち構へて居た、駐在英國領事アール、ダブルユー、ハルストの如きは、烈火のやうにな

英領事
の事
不
認
の
裏

製腦業の
退歩

つて、先つ反抗の氣焰を昂め、我當局者側者からは、臺灣駐在英國領事不信認の稟議を敢てした程に、對外交渉事件の火の手が、非常に熾りたてられた。其んな次第で、制度の問題ばかりに空騒ぎした當時の製腦界は、徹々として振はなく内地の其れにすら及ばなかつたのだ。其れか今日は約五百萬斤を産出し、世界の市場に於ける臺灣樟腦は、全く獨占の姿になた。之か臺灣樟腦界の表面的の事實である。一方、又始めて專賣制度を實施した、明治三十二年に、僅々三百十九萬八千七百四十斤に對する此價額百七十三萬二千七百四十圓により達しない其れが、其れから五年目の同三十六年には、二百七十三萬八千八百十二斤に對する價額二百五十一萬八千三百〇五圓になつたといふ如く、産額に於て稍減じたか、價額に於て稍増した傾向は生じたものの、兎に角二百萬斤臺の産額で五六年依然として居たのを見ると、事實に於て製腦業の發

樟腦專賣の真相

一五一

達か認められないのだ。殊に、同四十一年度に至つて、依然百六十七萬一千斤、同價額亦百七十一萬四百九十四圓に減じたのは、どう云ふ理由であつたのだらう。表面では、之を樟腦價格の暴落に歸して居る、臺灣總督自身が、又是れを左様にいひ觸して、當時の新聞紙上等にも、しかくいひ觸らさしめた事實があるやうだ。當時の臺灣總督府に於ける、民政長官は誰れであるかといへば、當時の殖産局長から、一躍して民政長官になつた、祝辰己である。乍然、此腦界の大打撃は、祝の罪でもなければ、時の總督の罪でもない。罪は全く後藤新平にある。後藤新平自身の職責は、此前年十一月に解けたもの、樟腦界の大打撃を與へた者は、實に後藤新平であるといはねばならん。サミュエル商會對、後藤新平の關係といへば、少し臺灣の事實に通じ、其臭い匂ひを難有いとした者には、直ぐ解る筈の事實で、四十一年度の數字に現れ、事實に現れた處の腦

四は後藤
新平に在

サミユール
對新平の
秘密

界の大打撃を、單に樟腦價格の暴落にのみ歸すのは、見當違ひであらう。直截にいへば、全島で拵へ上げた樟腦を、從來英國人サミュエルなる者に委せて、海外一手販賣をさせて居た處、其サミュエルなる者が、彌々益々利益を壟斷して、あらゆる横暴を極めた形跡が大にある。之が後藤新平としては、將來に考へ及ばし、自分の民政長官辭任後の事を考へると満足に枕を高くして寝る事の出来ない程の心配であるのである。何故高枕安臥の出來ぬ程心配でならんのかは、後藤新平、若くは、サミュエル商會かに問ふて見なくば分らんが、兎に角、恚ういふ噂を世間の一部では傳へて居た。其處で、サミュエル商會對する、海外に於ける樟腦賣渡契約満了と云ふ事になつて、ぼつとサミュエル商會の手がきれた。後藤新平としては、之で安心が出來たが知らんか、さて困つたのは、樟腦界の現状だ。勿論恚うあるべしと豫期した後藤にあつては、此解約以

前早くも相當の人を海外へ派遣し、樟腦の販路其他につき、サミエールの手を放しても、立派に出来る丈の視察を遂げさせ、愈々是れでいゝと云ふ處で、サミエールと解約したのだから、敢へて樟腦界で困る事のない譯だに、其困ると云ふのがおかしいのだ。之をサミエール側にはせると一種世間に知れない従來の關係も、後藤新平とはあつたらうし、又そうく急に解約とは思つて居ないに、内部に於て、着々進行して居た動機が、遂に其解約期を早めたと云ふのは、解せない理由だといつたそうだ。何も、尋常に約束して、尋常に解約された者なら、さまで苦情の起さる筈がないのだ。サミエールは、爾後非常なる反抗心を以て、臺灣總督府直營の輸出先くを荒し廻り、妨害し廻つた點から見ても、其處に、サミエール對、後藤新平の間に、他人の知らぬ一種の秘密のあつた事が知れる。此間に立て、唯り秘密を語るものか、阿久澤直哉の三伍公司

サミエールの妨害的策

樟腦悲境時代

である。三伍公司の何ものであるか、阿久澤直哉對、後藤新平の關係のごうあるかを知る者には、這般の消息が能く分る。内地にばかりて居て、臺灣を見ない政治家や、南清を能く知らない政治家には、是非共慙ういふ點を調べて貰ひたい。更にいへ換へると、後藤新平の樟腦專賣政策が、サミエールとの間に於ける、ある情實的反抗心から覆へされた事になるのである。斯様にして、臺灣の製腦は、一時非常なる悲境に陥つた。其れが今日では、五百萬斤以上に回復して、從來にない産額の増大を見るに至つたのは、主として、樟腦の產地たる蕃界が拓けたからで、輸出方面の事に至ては、尙依然サミエールの侵略的妨害を受けし、餘勢に苦められ、加之、其影響が、尙現に今の臺灣總督府の專賣局に及ぼして居る噂がある。何れにしても、窮めて見たいのは、サミエール對、後藤新平の關係である。

翻て又目下製腦に従事する者を見ると、賀田金三郎であるとか、櫻井勉であるとか、乃至は三井合名會社であるとか、岡本萬太郎であるとか云ふ内地人で、其事業の大半を占めて居る。然らば、此等の製腦業者は、今日どんな状態の下に製腦業を營んで居るかといふに、殆んど臺灣總督府の特別保護に頼らない者はない。先づ樟腦原料が何處にありやといへば、其れはいふ迄もない、内地人の住む平地や、住民の多く居る部落でなく、山の奥の山又奥の、すつと又奥の蕃界でない處はない。其處へ製腦を築いて樟腦を造り出すに至つては、いはゞ一種の冒險事業である。隨て利益が非常に多い。内地新聞の討蕃電報に『腦丁くわくしほ首さる』の情報の、年年頻々たるから見ても、製腦業の安全でない事が知れる。其安全でない製腦業者の爲、澤山の犠牲を惜まず、隘勇線を進め、其うしては蕃人懐柔に盡瘁しつゝ、其後々々へ製腦を築かせくして、製腦業

者に安全を興へる臺灣總督府の討蕃事業に戦死する人が、現に一ヶ月五十人は下るまい。此事業費としても容易な額でない。なる程蕃界か拓けてからは、千年も斧のは入らない處の良材を初め、さまざまの蕃産物か市へ出るから、今日多大の治蕃費を支出したり、人命の多大な損害位は意とするに足らんやうなもの、さて今日の討蕃情況から推して、最も直接に利益を受ける者は誰れかといふ時、吾人は製腦業者であると云ふ事を躊躇しない。何の事はない、隘勇線が一里進めば、製腦も一里奥へ進む、二里進めば、二里又奥へ進むといつた如く、隘勇線と云ふ安全な警戒區域の中を、だんく進めて、只取るやうな金を儲けるのが今の製腦業者である。隨て半官營の意味か含み、隨て如上の製腦業者、及臺灣總督府當該官吏との間には、一種付度しえられない情實か出來て居る。此又情實が、一種の弊害を、全島の製腦界に漲らし、製腦業者か官

吏か官吏か製腦者か、一寸分らない程度に迄情實の進んだ向もあるやうだ。内地ですら、曰く附の賀田金三郎輩迄か、さらですら情實の弊風多き、此製腦に従事して居るから、自然さまざまの問題が湧起するのである。吾人は、此際、臺灣製腦界の革新斷行を、佐久間臺灣總督に勸告する一人だ。又真正なる腦界の光明は、之からでなければ、望まれないと思ふ。

「三十一」臺灣銀行の財閥

孤劔飄として、一躍將軍の指南番となつて、俸祿一萬石を以て抱へられ、直ぐ大名の列に加つたのが、柳生飛彈守である。柳生飛彈守は、柳生流劍道の開祖で、且つ達人だ。之を祖先に戴くのが、今の臺灣銀行頭取柳生一義である。劍道を以て身を立てた者の子孫に、銀行家を以て世渡

りする人の出來たのは、不思議な現象だ。だが、仔細に見ると、柳生一義は、實際の銀行家でなくて、政治家である。其上禪味を帯んだやうな點がある。隨て實務的頭の行員に受けかわるゝいそである。此點に行くと、此間副頭取を止した下阪藤太郎は反對だ。下阪には他く迄銀行家らしい處がある。隨て行員の受けが柳生以上であつたさうだ。つまりいふと、銀行以外の長上によろしく、萬事を政略的にするのが柳生の得意なるに反し、下阪は他く迄内に銀行の實務に盡して、行員を實際に率ふる傍ら、營業の大成を期すといつたやうな風であつた。又銀行の大小は兎に角、銀行以外の處でも、恚ういふ兩面の人があるが、上と、其次とに二人ある處に、其長所々々も發揮され、短處々々も補はれて行くから、極めて又よい配合對照であるに拘はらず、臺灣銀行内部に於ける、此兩者の暗闘は、遂に下阪の辭任になつたらしい。事情を知る者は、下阪の辭

任を惜み、柳生派の横暴を罵つて居る。此等の側の人に言せると、柳生の生命は、前年度期に定つて居たのを、渠れが上京しては、巧みに運動の末、留任したのであつて、又之より先、今の藏相の縁に繋るとか云ふ二宮基成を理事として入れた迄は、いゝが、本年三月一日の株主總會で下阪の後を襲はせて副頭取にしやうと迄、渠れは考へたそうぢや。又監査役林爾嘉の後任に、桂次郎を加へたりしたのは、皆んな柳生の指金であるらしい。要するに、今の臺灣銀行は、後藤系を代表する賀田金三郎等の派と、桂系を代表する柳生、二宮、桂等の系統のみになつたらしい。後藤系の財閥といへば、普通神戸の鈴木とか、後藤勝造とか、阿久澤直哉とか、荒井泰治等の鹽水港製糖の一派とか、賀田金三郎等とかなるに對し、桂系は、大倉喜八郎、原富次郎、野澤源次郎、桂次郎、藤田傳三郎等の一派になる。此系統か、今や湖の如く臺灣へ流れ込んで、砂糖に、樟腦に、木材に、

後藤系及桂系の財

製茶に、あらゆる方面の利益を壟斷し、只臺灣銀行のみに、臭氣の稍少いと見て居る間に、公々然其臭氣を放散し初めたのだ。此放散者の主動者は、他にあるにしても、先づ柳生一義か表面の責を負はねばなるまいと思ふ。何れにしても、臺灣の財界に取つて、慶すべき現象でない。後藤系といつた處で、桂系といつた處で、其間にさままでの限界は立つてゐない、又立てる必要もない。其處で、此見地から、臺灣第一の金融機關臺灣銀行を見ると、全島經濟上の大機關として、中央銀行たる處の臺灣銀行か、黨人的政略の爲占領され終つた形がある。其れかあらぬか、臺灣銀行に、偏頗の措置ある説は、已に久しい以前から起つて居る。臺灣には、誰も知る如く、株式會社臺灣銀行の外に、同三十四銀行支店と、合名會社臺灣農商銀行と、株式會社彰化銀行と、合資會社嘉義銀行と、株式會社臺灣貯蓄銀行と、臺灣商工銀行とより他に銀行かないのである。

五百萬圓の資本金額でも、三十四は支店である、此他のものになると、十萬圓若くは、十五萬圓又は二十五萬圓内外の小銀行のみで、其處へ内地人經營の製糖會社ばかりでも十五六社もあつて、此資本金額が七千百萬圓以上に及んで居る。隨て此放資額も、之に比例せなければならん事になつて居るが、所在銀行の資本金と、製糖會社の資本金との比較研究に及び、此他一般生産業者對銀行の放資狀況に考へ及ぼす時、吾人は茫然として、不權衡の甚しいのに一驚を喫せざるを得ない。隨て、勢ひ不十分の放資現狀となり、島内第一の銀行に、頭取たる柳生一義若くは此系統に屬する者にゆかりなき者は、此放資に與り得れない事になり、與り得る事の少い事になり、遂に發展すべき産業が衰微する等の悲境に達する者か往々ある。つまりいへば、土地の産業の割合に銀行の少い處へ、放資法も偏頗で、資本金の少ない處へ、又島内第一といふべき臺

銀行の
資本との
比較

偏頗なる
放資法

對岸貿易
の衰へる
原因

灣銀行の營業振りが、傲慢と來てゐるから、手がつけられぬ。同行當事者に、餘り關係のない、島内土人側の事業家になると、殆んど絶無といつていゝ位、臺灣銀行初め、此他の銀行に疎外される。淡水の對岸貿易の思はずはしくないとはいはれるのも、安平税關が衰微したと云ふのも、一つは恁んな處にも原因がある。近頃になつて、臺灣銀行の向ふを張るやうな、大銀行設立の説は、いはば、本島人が、多年臺灣銀行以下の虐待に、酷遇されてゐた處の聲である。柳生以上の人物、柳生を壓伏する底の人物を、頭取に戴き、其うして、臺灣銀行を見かへそうと云ふのは、對臺灣銀行島民公憤の聲であると思つて、差支へがない。之を見ても、柳生が臺灣銀行なるものを、如何に政略的に利用しつゝ、全島民に金融機關たる處の實を盡さないかが分る。其れにしても、監督官廳たるものが、之を黙過しつゝあるのが訝しい。臺灣銀行なるものは、實に臺灣全島内の金融機

關たるに止らず、更に外南清へ手を伸べては、支店を置き出張所を置き又内内地に支店出張所を設け置くから見ても、臺灣銀行の現在專横的放資方法の結果が、果して那邊に及ぼすべきやを思へば、寒心に堪へざるものがある。臺灣に、尙大銀行の設立、及柳生一義對臺灣銀行の營業方針改善は、目下の最大急務であらう。財閥の弊亦茲に至るかを省みて、は此最大急務を、尙更に廣く天下に疾呼したく考へる。

「二十二」 臺灣事業界の人物

臺灣事業界の人物をいへば、先づ指を臺灣製糖の木下新三郎に屈せざるまい。渠れが臺灣に於ける澁澤榮一だと云はれて居るから見ても、渠れの人となりか知れる。渠れは其兄が何所かの縣知事であつた手筈で臺灣へ來て役人になり、今の臺灣日々新報の主筆になり、一百

五十圓の月俸に甘んじた時代もある。其れが一度、臍臍はらたきすると共に筆の天地を去つて、實業の天地へ出ると、當時の臺北で飛鳥を落した生沼永保なる者を追ひ越し、先づ煙草會社や、建物會社で小手調べ、其れからだん／＼其所へ出來る會社へも、彼所へ出來る會社へも、小首を出し又此人か出なくば、其會社が出來ん事になつた。現に又其の云ふ惡習慣が臺北には出來て居る。つまり、木下新三郎が臺灣の澁澤榮一であるのは、一つの身體で、幾つもの會社や、いろいろな事業に關係する點が一つ、他の一つは、澤山の會社へ關係しても、澁澤榮一同様、案外蓄財をしないと云ふ點である。澁澤榮一と、木下新三郎を較べると、其人物に大小こそあれ、其處に其れ丈同一の共通點を見出し得るから妙だ。又人物としても、如何にも應揚で、殿様風で、小策を餘り弄さない。殊に、此の頃は、内部に居て、悠々其乾分的關係者を矢面に立たせ、其の名を成

させる事に力めて居るが、事業界の方は、之と反對に不結果であるそう
だ。何故に又渠れが斯様に、早く臺北に名を成し、臺灣事業界第一流の
人物になつたかといへば、同じく臺灣第一流の中へ算へられる荒井泰
治や、榎瀬軍之佐や、賀田金五郎や、中村啓次郎や、金子圭介などの輩が、臺
灣に居るかと思れば内地へ去り、内地に居るかと思れば臺灣へ來ると
云ふ如く、臺灣におちついて居ないまに、彼れでなければ人物がないの
で自つと彼れの人物が高められたのだ。しかし自つと高まつたので
は決してない。其ういふ鹽梅式に渠れが臺灣の紳士になつた順序は、官
吏であつて、又新聞記者であつた階級からすん／＼艘上りに上つた才
の成功だ。其名の聞いた割合に成功せぬ渠れの成功は、尙前途遼遠の
部に屬するといつてよいが、只渠れとしてゐる處が一つある。云ふ
迄もなく、其れは彼れの専横心である。乃公在らすんば、事業界を奈何

るがで隠れさし
二つる處し

にせんやと云つた風で、臺灣事業界を我れは顔に振舞つて居る其れが
わるい。此又弊害が、いろ／＼な處へ飛んで、新に會社を起すにしても、
會を催すにしても、先づ渠れを一番初めに訪ねて、是れであるから、御援
助を願たいと言はねば、其成立に對つて、屹度何等かの妨害運動を試み
る。其れを木下新三郎一人きりなれば怖れるにも及ばんか、其處には
其處ありで、臺北には、所謂渠れの系統に屬する一種の系統が、隱然とし
て勢力をなし、例え總督府で許可した會社ですら、渠れの一睨みの爲成
立の危なかつた會社なども澤山ある。渠れは、斯様に迄して、臺灣の事
業界を横行しつゝあるが、初めて内地からでも行つた人の如き、皆渠れ
の専横を憤らぬ者はない。事は極めて卑近な例であるが、彼の花柳界
の賤妓ですら、木下新三郎の意を迎ひねば、多くの場合に渠れの左右
する宴會へ臨まれず、年が年中お茶の挽き通しをせねばならんから心

おとうさん
を浴せかけを

で泣いても、表面に丈は、宴會に於ける渠れの身邊を五月蠅い程圍繞し「おとうさん」を浴せ掛けるを常としつゝある。之を見ても、臺灣に於ける渠れの勢力の那邊にあるか、窺ひ得る。隨て臺北の宴會なる者は、悉く木下新三郎に率られる如き現状だ。藝者の如きでも、木下若くは、之に附隨する二三者の聘んだる如き光景だ。之が臺北の宴會だから馬鹿々々しくなつてしまふ。同じ、似合つてゐる事業家でも、澁澤榮一は其んな事をせん聞けば、頃日臺灣銀行の下阪副頭取を追ひ出した黒幕に渠れも潜んで居たさうだ。

賀田金は
長閩

賀田金に至つては、木下の如く、勿體ぶつたり、體裁ぶつたりするよりは、根が相場師肌の男だから、やり法が一層惡辣だ。出身は何處かと調べると、長閩の本家本元たる長州の萩である。初めは藤田組に入つて、日清戰爭當時には、大倉組に移り、臺灣が我有に歸して、樺山大將が此處に

總督たる頃、渠れ又大倉組臺北出張所の支配人として來臺し、大倉にも儲けさせれば、自分も少からず溜め込んだ。之ぞ渠れが、主であつた大倉組を従にする位の勢力を、今の臺灣に於て求めた抑々の資本である。此資本金と、渠れの企業振り、否其企業手段に就いては、世にさまざまの非難がある。其處で、大倉組對賀田金の争ひが少し起りかけたらしいがものにならず濟んだ。其中、渠れの始めやり出したものは、獨立經營の驛傳業である。其れからして、代々の總督が、長州閩の人であるを幸び、他人の出來ない、あらゆる便宜を強請しては、他人の出來ぬ、あらゆる方面の事業へ喰ひ込み、其うして今日をなしたものだ。人格がどうの履歴がどうのなど云ふ事は、渠れの頓着する處でない。此點に於て賀田は、木下に劣るが、木下よりは金を荒つばい方法で拵へて、臺灣としても、第一流の人物になつたが、内地では、たとえ呼び棄てにせよ、賀田金三

郎の姓名皆ながら呼ぶもののない程、人から侮蔑の意味を以て迎ひられて居る。麻布富士見町には大名然とした邸宅のありながら、不見轉藝者か何か引つ張り廻しては、よく芝浦邊を彷徨^{まよ}てる事もあるそうだ。賀田金の爲惜む。

賀田金の後任として、大倉組支配人になつたのが柵瀬軍之佐である。柵瀬は、東北人で、曾て新聞記者をした。隨て文字も有れば、常識もあるから、同じ大倉組支配人としても、賀田金のやうな、悪辣な手腕を振はない。しかし、大倉組といふ舞臺がいゝ、柵瀬の才子である故もあるが、何れしても、此又ない舞臺に居て、未だ秩序の回復しない臺灣の企業に與つたのだから、金は獨りで儲かるに定つて居る。世間に、彼れの成功の内容を怪む向きのないでもないが、其れは渠れを誤解した者の言だ。渠れか、大倉組から足を抜いて、臺北に柵瀬兄弟商會を起したのはつま

柵瀬軍之佐
は新聞記者
出身也

柵瀬出身
中村啓次郎

中村は策士か

り、其儲けた金が資本になつたのだ。其れを代議士として、議會に送つたのも、畢竟は此金力が手傳つて居る。若し、木下新三郎が濫澤で、賀田が雨敬だとすれば、柵瀬は今村清之助見たいな處がある。中村啓次郎に至つては、努力を積んで今日を致した者に近い。出身は辯護士だが、俗にいふ灣辯出身である。灣辯は、同じ辯護士でも、臺灣の法曹界では珍重されてゐない。然るに中村啓次郎に限つて中啓の綽名はあつても、不思議に珍重されて居る。或者は、之を代議士である故とも云つて居る。其故か、ごうかは知らんが、兎に角、臺灣を踏臺にして、現に臺灣に住んで居る代議士として、柵瀬軍之佐と共に、必ず人か指を屈する處の人になつた。本業の辯護士以外に、さまざまの事業界に手を出して居るか、鋒芒の露し法か巧妙である。内地の代議士などは、柵瀬も、中村も同じ臺灣だか、中村は策士らしい。柵瀬になると、表面に悪

黨ぶる處があつても、其實惡黨ではないが、中村になると考へもんだ』と云つて居た。此説を中村が首肯得るか、どうかは分らんが、兎に角今の中村啓次郎は、昔の中村啓次郎でなくて、進化した中村啓次郎だと言ふ事は事實であらう。

荒井泰治に至ては、賀田金とも違へば、木下新三郎とも違へば、中村や榊瀬やとも違つた、一種質朴のやうな、鋭い調子を以て成功した一人であらう。此人は第一流の紳士であらう。此人かどうして成功したかといふに、此人も元は、中江兆民門下から出で、時事新報の記者であつた。又鐘紡にも居れば、富士紡績にも居つた。其れで、何でも、サミユル商會の支店長も何んかで渡臺して、之も賀田や榊瀬の輩が、大倉組を踏み臺にして、成功した如く、巧みにサミユル商會を利用して、遂に今日をなしたものである。荒井も、榊瀬同様東北人である。後藤新平との關係も、略

兆民門下
荒井泰

ぼ推察する事が出来るものの、元來が鋭く出来上つた男である。隨て世には疎腕家といふ噂さか高い。果して、疎腕家であるか、どうか、其等は著者の知らん方面の事だ。若し、此人に、内地と臺灣を忙しく往來せず、臺灣にじつとし居るなら、臺灣第一の事業家として、木下新三郎以上に人が囁すであらうが、其れは荒井の出来ない事であらう。文荒井としては、其れを欲しないかも知れん。兎に角にも、内地でも、一寸問題になつてゐる、又内地としても、新人物に數ふべき人であらう。同じ兆民門下でも、伊藤金彌になると初めこそ、新聞記者もしたが、志を官海に向けた爲、現在の臺北郵便局長を漸く羈ち得たにしたか過ぎん。更に、之を同門下の幸徳秋水に比べてはどうか、兆民門下からは、いろ／＼な人物が出たもんだ。此他にも、臺北には、さまざまの中堅的人物、實際的力を其方面へ注ぎつゝある有望の人物、碎いていへば、第二、三、四流の人

物は未だ澤山あるが内地に迄名を知られた人物は先づ以上の人物位であらう。又事實、恁ういふ人物が中心になつて其れから其れへと臺灣の事業界は動いて居る。稍々新人物とも見るべき松村鶴吉郎や川瀬周次や山下秀實や河原義太郎や伊藤政重や片山昂や渡邊國重平井勢次郎小松楠彌木村久太郎等の人物中川瀬の時代はもう去つた。片山は事業界の人でなし山下は老いる河原も純然たる事業界の人でなし是から矚目に値するは小松楠彌松村鶴吉郎伊藤政重渡邊國重平井勢次郎等の活動であらう。

其うかと思ふと全然内地に居て臺灣の事業界に頭丈出して居る人物がある。例へば横濱の安部幸兵衛之は臺南に支店があつて臺灣の砂糖界には却々勢力を扶植したであるとか東京の藤崎三郎助であるとか濱口吉右衛門であるとか大倉喜八郎であるとか横濱の大谷嘉兵衛

であるとか村井吉兵衛であるとか此他毛利元昭や山本佛次郎や村上先や古川虎之助や今村繁三や朝吹英二や相馬順胤や新田忠純や村上太三郎や林博太郎や井上勝之助や曰く附の鈴木藤三郎や原富太郎や大倉孫兵衛や松方五郎や森村市左衛門や若尾民造や増田増蔵や益田太郎や青田綱三や關清英や高島小金治や藤山雷太や藤田四郎や益田孝や山本達雄や黒田長成や牟田口元學や細川謹成や小野光景や茂木保平や山中隣之助やの内地の實業家や縉紳か僕を代ふるも盡きない程臺灣事業界に名を述べ實を見せて居るものはあつても中七八名を除けば他は全く内地在住の者で甚しいものになると臺灣を見た事のない連中臺灣のどんな處かを知らん連中が多いのだ。其んなら恁ういふ人達がどうして臺灣關係を作つたかといへば其れはいふ迄もない『屹度儲かる』といひ觸らし歩いた製糖會社株を有たせられたか